

シラバス・予備学習ガイド

シラバスの掲載頁は、p.7の開設科目一覧にある各授業科目の「シラバス頁」を参照してください。

各シラバスには、基礎文献リストやその活用方法等を記載した履修前の予備学習ガイドを添付していますので、授業を受講する上での参考資料として活用してください。

科目名	子ども人間学総論	副題	
担当者	佐伯 胖・生田 久美子（オムニバス）		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>本講義では、学部で学んだ保育実践に関わる「知識」や「技能」を基盤にして、「子ども人間学」とは何か、「子ども人間学」における、人間学的学識に基づく質の高い保育実践とは何か、また質の高い保育の実践家（「省察的实践家」）とは何かについて考察する。</p> <p>教師や保育者は現場に出ると予想外の様々な問題に直面し、学んできた個々の知識・技能が使えない現実と直面する。そのようなときは、それらの知識や技能のもとになっている「人間としての子どもとは何か」に立ち返ることが必要になる。佐伯担当の講義では、さまざまな教育論の背後にある「子ども観」「人間観」（特に、保育思想を中心に）を検討し、「子ども人間学」の観点から「保育」をとらえ直す重要性について考える。</p> <p>また、生田担当の講義では、佐伯担当の講義を踏まえて、「子ども人間学」の観点から保育における質の高い実践とは何か、質の高い実践家（「省察的实践家」）とはどのような専門家であるのかを考える。その際に、「省察的实践家」について、D. ショーンの『専門家の知恵』を読みながら各自が考察する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 「子ども人間学」とは何かを理解する。</p> <p>2. 「子どもを子どもとしてみる」保育と「子どもを人間としてみる」保育の違いについて理解する。</p> <p>3. 「子ども人間学」における、人間学的学識に基づく質の高い実践家（「省察的实践家」）とは何かを理解する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	教育と人間—教育人間学入門（佐伯）		
2	子どもを「人間としてみる」ということ（佐伯）		
3	「共感」とはどういうことか（佐伯）		
4	「主体的・対話的で深い学び」とは何か（佐伯）		
5	「二人称的アプローチ」とは（1）（佐伯）		
6	「二人称的アプローチ」とは（2）（佐伯）		
7	「論文を書く」とはどういうことか—理論編（佐伯）		
8	「論文を書く」とはどういうことか—実践編（佐伯）		
9	「省察的实践家」とはどのような実践家か（生田）		
10	「省察的实践家」を根底で支える人間の「知」—G. ライルの分析（生田）		
11	「省察的实践家」を根底で支える人間の「知」—D. ショーンの分析（生田）		
12	保育における「省察的实践家」とは何か—「技術力」から「省察力」へ（生田）		
13	保育における「省察的实践家」とは何か—「省察力」を支える人間学的学識（生田）		
14	保育における「省察的实践家」の事例検討①（生田）		
15	保育における「省察的实践家」の事例検討②（生田）		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）・発表等（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後には授業内容の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	<p>D. ショーン 佐藤・秋田訳『専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える』、ゆみる出版、2001年</p> <p>G. ライル 坂本他訳『心の概念』、みすず書房、1987年</p> <p>佐伯胖編著 『「子どもがケアする世界」をケアする』、ミネルヴァ書房、2017年</p> <p>佐伯他 『子どもを「人間としてみる」ということ』、ミネルヴァ書房、2013年</p>		
参考文献	<p>小川博久 『保育援助論』、萌文書林、2000年</p> <p>村井実 『日本教育の根本的変革』、川島書店、2013年</p> <p>森口佑介 『おさなごころを科学する—進化する乳幼児観』、新曜社、2014年</p> <p>岸井慶子 『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る』、ミネルヴァ書房、2013年</p> <p>N. Noddings, Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education, Univ of California press, 1984</p>		

【予備学習ガイド】

科目名	子ども人間学総論
担当者	佐伯 胖・生田 久美子（オムニバス）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「子ども人間学総論」の授業を履修するために、「人間学」及び「教育学」、「保育学」の領域での文献を読み、基礎理解をすること。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①金子晴勇 『現代ヨーロッパの人間学』、知泉書房、2010年 ②正高信男 『0歳からの子育ての技術』、PHP研究所、2002年 ③正高信男 『0歳児がことばを獲得するとき』、清流出版、2000年 ④正高信男 『子どもはことばをからだで覚える—メロディから意味の世界へ』、中公新書、2001年 ⑤松沢・長谷川編 『心の進化—人間性の起源をもとめて』、岩波書店、2000年 ⑥無藤隆 『協同するからだ—ことば—幼児の相互交渉の質的分析』、金子書房、1997年 ⑦村井実 『教育学入門 上下』、講談社、1983年 ⑧佐伯胖 『「わかる」ということの意味』、岩波書店、1995年 ⑨佐伯胖 『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために』、東京大学出版会、2014年 ⑩澤口俊之 『幼児教育と脳』、文芸春秋、1999年 ⑪汐見稔幸監修 『保育士をめざす人の本』、成美堂出版、2014年
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」を取り巻く状況に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	人間学概論 I (哲学と人間)	副題	
担当者	生田 久美子・増田 いづみ (オムニバス・一部共同)		
開講期	前期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>人間が本来もっている「ケア」性について、「哲学」及び「介護」の両領域において注目され、独自の観点から研究が進められている「ケアリング」論の理論および実践の二側面から考察する。</p> <p>今年度は、広井良典著の『ケアを問い直す』を輪読し、「ケア」とはどのような意味をもつものなのか「教育」「介護」の場面に即して考察していく。</p> <p>生田担当の講義では、人間が本来もっている「ケア」性について理解を深めるために「哲学」領域での「ケアリング」論の研究の経緯を辿ることから始める。</p> <p>また、増田担当の講義では、「介護」領域での実践事例を通して介護現場における実践の基盤となる聴くこと、関わることに焦点をあてて考察していく。生田の講義で考察する「ケア(リング)」理論を交差させ、理論的及び実践的課題について検討する。</p> <p>生田、増田共同の講義では、「哲学」と「介護」の其々の分野での理論および実践研究の成果を総合的に検討し、あらためて人間がもつ専門的な「技術」や「知識」を超えた、人間の「ケアリング」という営みの可能性について考察する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間が本来もっている「ケア」性について理解を深める。 2. 「哲学」の領域での「ケアリング」論を理解する。 3. 「介護」の領域での実践において「ケアリング」がどのような実践として捉えられているかを理解する。 4. 「子ども人間学」における「ケアリング」論の意義について理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー「人間」と「ケアリング」(生田)		
2	「哲学」領域での「ケアリング」論研究の経緯を辿る(生田)		
3	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』①(生田・増田)		
4	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』②(生田・増田)		
5	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』③(生田・増田)		
6	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』④(生田・増田)		
7	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』⑤(生田・増田)		
8	介護実践事例① あるがままに受け入れる(増田)		
9	介護実践事例② 生きてきた歴史(増田)		
10	介護実践事例③ 共生型ケア(増田)		
11	人間がもつ専門的な「技術」や「知識」を超えた、人間の「知」としての「ケアリング」(生田・増田)		
12	「事例」研究①子ども(生田・増田) 修士生の実践例の検討		
13	「事例」研究①子ども(生田・増田) 修士生の実践例の検討		
14	「事例」研究①子ども(生田・増田) 修士生の実践例の検討		
15	総括：人間がもつ、本性としての「ケアリング」(生田・増田)		
期末	試験なし		
授業に関する連絡	本授業では前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。		
評価方法及び評価基準	最終レポート(40%)、授業内で提出する小レポート(30%)、発表(30%)に基づいて評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業後は授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢化社会』ちくま書房 2003年 (尚、初回に授業で使用する箇所をコピーしたものを配布する。)		
参考文献	佐伯胖 『共感一育ち合う保育のなかで』、ミネルヴァ書房、2007年 藤川信夫 『教育/福祉という舞台 動的ドラマトルギーの試み』、大阪大学出版会、2014年 佐伯胖 『子どもがケアする世界をケアする』、ミネルヴァ書房、 広井良典『ケア学』、医学書院、2000年 M. メイヤロフ著、田村ほか訳『ケアの本質ー生きることの意味』、ゆみる出版、1987年 露木悦子『介護の心・看護の心 心に響く共感のアプローチー介護の心を「聴くこと」に求めてー』、医学書院、2002年		

【予備学習ガイド】

科 目 名	人間学概論 I (哲学と人間)
担 当 者	生田久美子 増田いづみ
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「人間学概論 I」の授業を履修するために、「哲学」及び「介護」の領域でのケアリングに関する文献を読み、基礎理解をすること。
文献リスト	<p>広井良典 『ケア学—越境するケアへ』、医学書院、2000年</p> <p>広井良典 『老人と子ども』統合ケア：新しい高齢者ケアの姿を求めて』、中央法規出版、2000年</p> <p>広井良典 『ケアのゆくえ科学のゆくえ』、岩波書店、2005年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「ケア」や「介護」をめぐる課題に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	人間学概論Ⅱ（文学と人間）	副題	
担当者	印藤 京子・染谷 裕子（オムニバス・一部共同）		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>文学は、それを生み育んだ時代の精神やその時代に生きる人間の内面を表現する芸術である。そして文学に登場する人間は、その時代を投影する存在であると同時に、その前の時代を反映しかつ次の時代を担う存在である。本講座では、家族ならびに社会的弱者の2つに焦点を絞って登場人物を掘り下げ、人間に対する洞察力を深める。（共同1回、オムニバス14回）</p> <p>印藤担当（第2回～第8回）では、シェイクスピアの<i>The Merchant of Venice</i>を題材にして、そこに描かれたさまざまな人物を、歴史・社会・文化の側面から考察する。</p> <p>染谷担当（第9回～第15回）では、室町時代を中心に成立した短編物語群「お伽草子」の中で多くの人に親しまれたと思われる「文正草子」を取り上げる。長年仕えた主人に勘当された男が塩売りで大成功をおさめ立身出世する物語である。言葉と表現を切り口として、その時代の人々の物の見方を探っていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 所定のテーマに関する文献および資料を理解し他者に説明できる。</p> <p>2. 所定のテーマに関する考察を口頭ならびに書面にてわかりやすく発表できる。</p> <p>3. 所定のテーマに関する他者の発表に対して的確な指摘ができる。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	講座案内、課題図書、資料検索方法等（印藤・染谷）		
2	〈講義〉エリザベス朝の演劇（印藤）		
3	〈発表・討議〉基本事項：時代背景・生涯・作品・ユダヤ人（印藤）		
4	〈発表・討議〉作品考察：第1幕（印藤）		
5	〈発表・討議〉作品考察：第2幕（印藤）		
6	〈発表・討議〉作品考察：第3幕（印藤）		
7	〈発表・討議〉作品考察：第4幕（印藤）		
8	〈発表・討議〉作品考察：第5幕（印藤）		
9	〈講義〉「お伽草子」とは何か（染谷）		
10	〈講義〉作品「文正草子」について 絵巻絵本と異本群		
11	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 勘当され塩売りとなる（染谷）		
12	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 長者となった文正（染谷）		
13	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 美しい二人の娘（染谷）		
14	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 中將と姉娘の恋（染谷）		
15	〈講義〉「文正草子」の周辺（染谷）		
期末			
授業に関する連絡	1・2・3・9・10・15は主に教員が講義するが、その他は受講生による発表および討議が中心となる。		
評価方法及び評価基準	口頭発表（30%）、討議（20%）、考察報告（50%）により評価する。		
事前・事後学習の内容	事前学習：口頭発表に向けて入念な準備 事後学習：討議を踏まえて口頭発表に手を加え、考察報告を作成		
履修上の注意	文献理解に取り組む真摯な姿勢が求められる。シェイクスピア作品の考察に際しては、対訳本もしくは原書を参照すること。		
テキスト	初回授業時に指示する。		
参考文献	<p>永野藤夫『世界の演劇文化史—人類史の生のリズムを移す世界劇場』 原書房 2001</p> <p>坂本和男、来住正三編『イギリス・アメリカ演劇事典』 親水社 1999</p> <p>大島建彦ほか編『室町物語草子集』 新編日本古典文学全集63 小学館 2002</p> <p>徳田和夫編『お伽草子事典』 東京堂出版 2002</p>		

【予備学習ガイド】

科 目 名	人間学概論Ⅱ（文学と人間）
担 当 者	印藤 京子・染谷 裕子（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	『人間学概論Ⅱ』（文学と人間）の授業を履修する際は、演劇や古典文学にふれることの意義や面白さについて事前に理解しておくことが望ましい。そのため、以下に掲げる書を何冊か事前に読んでおくこと。加えて、事前、あるいは並行して、本授業で扱う英国演劇およびお伽草子について、基本的な知識を得ておくこと。
文献リスト	<p>①喜志 哲雄 『英米演劇入門』 研究社 2003</p> <p>②喜志 哲雄 『シェイクスピアのたくらみ』 研究社 2008</p> <p>③荒井 良雄 『やさしいシェイクスピア』 栄光社 2011</p> <p>④大岡信著『おとぎ草子』（岩波少年文庫）2006</p> <p>⑤西本鶏介著 『御伽草子』（21世紀によむ日本の古典13）ポプラ社 2002</p> <p>※④⑤は子ども向けの現代語訳本だが、お伽草子の内容を知るのに読んでみるとよい。</p> <p>⑥市古貞次校注『御伽草子 上・下』（岩波文庫黄）</p> <p>※江戸時代の版本をテキストとする。古文でまず手軽に読むのに適する。</p> <p>⑦大島建彦ほか編 『室町物語草子集』（新編日本古典文学全集63）小学館 2002</p> <p>※一般向けではあるが注や付録はくわしく専門家にも役立つ。古文と現代語訳が対照。授業で必ず使用する。</p> <p>⑧石川透『御伽草子その世界』勉誠社出版 2004</p> <p>※お伽草子を知るのに適する書。豊富な図版と共にお伽草子の著名な作品を選びわかりやすく解説。</p> <p>⑨佐竹昭広著『下剋上の文学』（ちくま学芸文庫）1993</p> <p>※室町の文芸を読み解く上で読み継がれた名著（1967初版）。お伽草子の時代背景を理解するのに適する。</p>
その他履修に必要な学習	その他、演劇や古典文学に現れた人間像をより深く考察していくためには、作品の時代背景についての理解が求められる。

科目名	人間学概論Ⅲ（政治と人間）	副題	
担当者	藤森 智子・國見 真理子（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>社会は個々の人間から形成され、社会科学の一つである政治学は広く人間の営みを扱うといえよう。本来、政治とは利害の調整の過程であるといわれる。本講座は、国家や社会の統治や政策が人間形成に与える影響の検討を主な目的とする。</p> <p>初回講義は、藤森と國見が共同で、政治の観点を中心に、国家と人間に関わる関係を概観する。藤森担当の講義では、マクロな視点では国家の統治・政策を取り上げ検討する。ミクロな視点では個々の政策と人間形成を取り上げ、ケース・スタディを行う。國見担当の講義では、国家と人間との関わりを経済、法律面から取り上げ、ケース・スタディを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国家に関わる社会科学のアプローチを理解する。 2. 国家と人間形成の諸相を明らかにする。 3. 国家に関わる多様な問題分析の方法を確立する。 		
1	ガイダンス/研究課題の設定(藤森・國見)		
2	近代社会と人間(藤森)		
3	国家権力と人間(藤森)		
4	民主主義と人間(藤森)		
5	国家とナショナリズム(藤森)		
6	言語政策と人間①：近代日本を例に(藤森)		
7	言語政策と人間②：日本の植民地を例に(藤森)		
8	受講生の発表と討論(藤森)		
9	統治と人間(國見)		
10	国家権力を巡る諸問題①：行政国家現象(國見)		
11	国家権力を巡る諸問題②：財政問題を例に(國見)		
12	国家権力を巡る諸問題③：裁判員制度を例に(國見)		
13	事例検討①：統治を巡る判例検討(國見)		
14	事例検討②：人間を巡る判例検討(國見)		
15	総括(國見)		
期末			
授業に関する連絡	「でんでんぱん」を通じて履修者に適宜連絡する。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表・討論(50%)及び期末課題(50%)で評価する。		
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席してほしい。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めてほしい。		
履修上の注意	特になし。		
テキスト	特になし。		
参考文献	佐藤幸治「日本国憲法論」(成文堂) 別冊ジュリスト『憲法判例百選Ⅰ・Ⅱ』(有斐閣)		

【予備学習ガイド】

科目名	人間学概論Ⅲ（政治と人間）
担当者	藤森 智子・國見 真理子（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	人は、時に協力し、時に対立して社会を形成してきた。政治の主な機能は「社会の利害調整」であるといわれる。社会科学の学習のためには、現代の日本社会や国際社会に関心を持ち、同時に社会問題に対する観察力を養うことが不可欠である。受講者は日頃からニュースや新聞などに目を通し社会の問題を把握しておくこと。また、事前に文献リストに挙げる政治学及び憲法の基礎的概念を学習しておくことが望ましい。
文献リスト	<p>①堀江 湛『政治学・行政学の基礎知識』一藝社、2004</p> <p>②小林 良彰『政治学入門』放送大学教育振興会、2007</p> <p>③久米 郁男『現代日本の政治』放送大学教育振興会、2011</p> <p>④ロバート・A. ダール『デモクラシーとは何か』岩波書店、2001</p> <p>⑤バーナード クリック『デモクラシー』岩波書店、2004</p> <p>⑥渋谷秀樹『憲法1・2』有斐閣、2010</p> <p>⑦芦部信喜「憲法判例を読む」岩波書店、1987</p> <p>⑧木村晋介監修『激論！「裁判員」問題』朝日新書、2008</p> <p>⑨神野直彦『財政学』有斐閣、2007</p>
その他履修に必要な学習	日頃から、社会問題を巡る報道資料や各種文献などに目を通し、社会問題の諸相について自分なりの理解を深めておくことを期待する。

科目名	人間学概論Ⅳ（芸術と人間）	副題	
担当者	安村 清美・三政 洋一（オムニバス）		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>本講義は、人間の芸術活動がいか「人間」を人間たらしめてきたか（いるか）について、歴史的、実践的な観点から探究することを目的とする。特に、人間存在そのものである身体を対象とする舞踊学、美術解剖学領域の研究を通して、時空間における芸術の表現と伝達の関係性を考察し「人間の芸術性」及び「芸術の人間性」について検討していく。</p> <p>安村担当の講義では、「人はなぜ踊るのか、舞踊はなぜ人間社会に存在し続けているのか」という問いについて、歴史と地域の中で生成され創造・伝承されてきた舞踊を概観し、さらに、舞踊各ジャンル固有の芸術領域としての特殊性とその存在の意味について、芸術の表現と伝達の関係性から探究する。</p> <p>また三政担当の講義では、人を主題とする様々な美術作品について、人体解剖学を基にその表現の特徴について考察していく。人間は太古から現在に至るまで人の姿・形を平面や立体にして表してきたが、殊に彫刻の分野においては歴史上、人の形を基に表した作品が主流である。人体の構造を概観しながら古今東西の美術作品、特に彫刻作品を中心に見つめて人間の芸術表現について探求していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>人間の芸術活動について舞踊、美術解剖学を中心に理解を深めていくことがねらいであり、次の到達目標を設定する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 舞踊について①伝承文化及び比較文化の観点から海外、日本の舞踊について理解する。②演じられた人間像としての芸術舞踊であるバレエについて理解する。③舞踊芸術の表現と伝達性について、バレエ以降の人間と舞踊について考察を深める。 美術解剖学について①人体の基本的な構造について理解する。②ギリシア時代の彫刻からミケランジェロ、ロダンなど西洋における彫刻家の作品を見つめ、その思想、造形上の特徴について理解する。③近・現代における様々な美術作品を観ていくこと人間の為す形について考えを深める。 		
授業の方法・授業計画			
1	舞踊文化の概観—歴史と地域の中で生成され伝承されてきた舞踊①海外（安村）		
2	舞踊文化の概観—歴史と地域の中で生成され伝承されてきた舞踊②日本（安村）		
3	伝承文化としての舞踊の比較検討（安村）		
4	芸術としての舞踊—演じられ語られた人間像①バレエ（安村）		
5	芸術としての舞踊—演じられ語られた人間像②バレエ以降（安村）		
6	芸術としての舞踊—演じられ語られた人間像③現代（安村）		
7	舞踊芸術の表現と伝達の関係性—身体と舞踊の今日的課題（安村）		
8	「人はなぜ踊るのか」という問いについての再考（安村）		
9	美術解剖学概観—人間による人体の追求について考える（三政）		
10	造形芸術に見る人体の法則—プロポーション、バランス、リズム（三政）		
11	頭部の構造①（三政）		
12	胴体の構造②—胸部・腹部・腰部（三政）		
13	上肢の構造③—前腕・上腕・手（三政）		
14	下肢の構造④—大腿・下腿・足（三政）		
15	造形芸術における人間像（三政）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。演習では、履修生に課題を課することがある。		
評価方法及び評価基準	レポート(50%)、および発表(50%)に基づいて総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習：シラバスを確認し、授業に関わる内容について予習すること。事後学習：学習した内容について各種文献等を用いて検討し、理解を深めること。		
履修上の注意	芸術に関心を持ち、意欲的に授業に臨むこと。		
テキスト	「ダンス・バイブル—コンテンポラリー・ダンス誕生の秘密を探る」乗越たかお、2010、河出書房新社 その他授業時にプリントを配布する。		
参考文献	「考える身体」三浦雅士、1999、NTT出版 「アーティストのための美術解剖学」ヴァレリー・L・ウインスロウ、2013、マール社		

【予備学習ガイド】

科 目 名	人間学概論Ⅳ（芸術と人間）
担 当 者	安村 清美・三政 洋一(オムニバス)
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>安村担当分 指定した参考文献を基本に、芸術舞踊および民族舞踊および身体観に関する事前学習を行い授業に臨むこと。また、舞踊の歴史についても関心を持ち、事前、事後において学習を深めること。</p> <p>三政担当分 指定した参考文献及び配布した資料等を基に、人体表現に関する事前学習を行い授業に臨むこと。また、美術史についても関心を持ち、事前、事後において学習を深めること。</p>
文献リスト	<p>安村担当分</p> <p>①『芸術とは何か』S・K・ランガー 池上、矢野訳 岩波新書 1984</p> <p>②『芸術としての身体』尼ヶ崎彬編 勁草書房 2001</p> <p>③『技術としての身体』野村、市川編 大修館書店 1999</p> <p>④『バレエとダンスの歴史』鈴木晶編著 平凡社 2012</p> <p>三政担当分</p> <p>①『アーティストのための美術解剖学 デッサン・漫画・アニメーション・彫刻など、人体表現、生体観察をするすべての人に』 ヴァレリー・L・ウインスロウ 宮永美知代(訳・監修) マール社 2013</p> <p>②『人体デッサンの基礎 美術解剖の知識と応用』ジョージ・ブリッグマン 日貿出版社 1989</p> <p>③『art 世界の美術』（コンパクト版）アンドリュー・グレアム＝ディクソン 樺山紘一(日本語版総監修) 河出書房新社 2017</p>
その他履修に必要な学習	<p>安村担当分 人間の表現としての舞踊に日常的に関心を持ち、公演やパフォーマンス、ワークショップなどの情報を収集し作品鑑賞を行うことが求められる。</p> <p>三政担当分 また、日常的に美術作品に関心を持ち、美術館や展覧会などで作品鑑賞を行うことが求められる。展覧会等については逐次情報を提供する。</p>

科目名	人間学概論Ⅴ（自然と人間）	副題	
担当者	石橋 哲成・外川 重信（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>本講義では、「自然」と「人間」の両者に関連させながら、「自然と人間形成」及び「自然体験」をテーマにして、理論と実践の両側面から考察する。</p> <p>石橋担当の講義では、ヨーロッパの近世におけるルソーやフレーベルの自然主義的教育論、さらにはヨーロッパと日本の近代において展開した新教育運動、とりわけ田園教育塾運動を考察することによって、自然と人間形成がどのように深く関わりあっているのかを探っていく。</p> <p>外川担当の講義では、4回の講義においては、自然体験の理論と方法について考察する。特に登山・冒険教育・キャンプなどの野外運動の実際とその課題について考察する。3回分に相当する学外授業においては、バリエーションルートを使った登山を通して、自然の中で仲間と共同生活を体験し、自然と里山、自然と登山、「自然」と人間との関係について考察する。</p> <p>最終回の石橋と外川の共同授業では、それまでの14回の授業をふり返り、総まとめをおこなったうえで、将来の「自然」と「人間」との課題をとともに考えてみたい。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自然と人間の深い関わりについて理解する。 2. 自然が人間形成に与える影響について理解する。 3. 学外授業を通して、「自然」と「人間」との関係を過去と現在までを鳥瞰し、今後の関係を理解する。 		
1	「自然」と「人間形成」の関わりについて考える（石橋）		
2	ルソーにおける自然と人間形成（石橋）		
3	フレーベルにおける自然と人間形成（石橋）		
4	イギリスの新教育運動と自然（石橋）		
5	ドイツの新教育運動と自然（石橋）		
6	日本における新教育運動と自然（石橋）		
7	全人教育の場としての自然（石橋）		
8	自然体験の方法（外川）		
9	冒険教育の理論と課題（外川）		
10	野外運動（キャンプ）の理論と課題（外川）		
11	登山の理論と実際の方法と準備（外川）		
12	高尾山登山における日本文化と自然の融合（外川）*休日に振り替え授業をする。		
13	高尾山登山におけるバリエーションルートの歩行体験（外川）*休日に振り替え授業をする。		
14	高尾山登山における登山の技術（外川）*休日に振り替え授業をする。		
15	総まとめ、ならびに今後の自然と人間の課題を考える（石橋・外川）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では講義や演習、さらには学外授業を取り入れて行う。演習・学外授業では、レポート・レジュメ作成を課する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（30%）・発表等（40%）・最終レポート（30%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後に反復学習をすること。安全な学外学習を行うための準備をすること。		
履修上の注意	自然と人間形成の関係、自然保護に問題意識をもって、本授業に臨み、主体的・積極的に議論に参加すること。学外授業の登山では、事前から健康に留意し、体力をつけておくこと。		
テキスト	石橋哲成「教育の場としての自然をどのように捉えるか」（『全人教育通論』玉川大学、1999）		
参考文献	星野敏男、金子和正、『野外教育の理論と実践』杏林書院、2011 ディックブラウティ等、『アドベンチャーグループカウンセリングの実践』みくに出版、1997		

【予備学習ガイド】

科目名	人間学概論Ⅴ（自然と人間）
担当者	石橋 哲成・外川 重信（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	本授業を履修するために、「人間と自然との関わり」、「自然と人間形成」等々に興味を持ち、予習をしてから授業に臨むことが望ましい。また、学外授業を安全に行うための予備知識を学習することが望ましい。
文献リスト	①ルソー著、永杉喜輔他訳『エミール』、玉川大学出版部、1984 ②フレーベル著、小原國芳訳『人の教育』（『フレーベル全集 第二巻』）、玉川大学出版部、1968
その他履修に必要な学習	自然と人間形成の問題や、自然保護に問題意識をもって、日頃から、新聞・テレビ・関連雑誌を読んで本授業に臨むこと。普段から人とのコミュニケーションを大切にしておくこと。登山等の学外活動を行うために、長時間歩行するなど、日頃から体力を高めておくこと。

科目名	人間学研究法	副題	
担当者	犬塚 典子・藤原 亮一（オムニバス）		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>人間学の研究法は研究のデザインをはじめ、データ収集の技法や各種の方法論的アプローチ、さらには修士論文作成の手法について理解を深める。</p> <p>藤原担当（7回）は、実証的研究（量的研究）の理論と実際を学ぶ。また、なぜ方法論的に対立する量的、質的研究者がともに人間学研究を発展させて来たのかについて、存在論、認識論のリフレクションから考察する。</p> <p>犬塚担当（8回）は、質的研究を行うための知識と技法を学ぶ。関連領域の基礎的な論文を読み、先行研究の検討、文献リストの作成、概念・言葉の定義、論点・議論の整理法などを身につける。まとめとして、KJ法、セブン・クロス・ワークショップを行い、論文執筆のためのアウトライン作成を試みる。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 量的研究方法および質的研究方法について基本的な理解を深める。</p> <p>2. 各自の研究テーマにおけるリサーチクエスションと合致した研究方法を見出す。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	人間学研究法 I：存在論的、認識論的、方法論的リフレクション（藤原）		
2	研究法のための存在論、認識論（藤原）		
3	研究法のための方法論（藤原）		
4	実証的研究①実験法（藤原）		
5	実証的研究②横断的研究（藤原）		
6	実証的研究③縦断的研究（藤原）		
7	実証的研究④調査票調査（藤原）		
8	人間学研究法 II：ライフコース研究を手がかりに（犬塚）		
9	質的研究①先行研究の検討、文献リストの作成（犬塚）		
10	質的研究②概念、言葉の定義（犬塚）		
11	質的研究③歴史的調査（犬塚）		
12	質的研究④ケース・スタディ（犬塚）		
13	質的研究⑤論点、議論の整理（犬塚）		
14	情報整理について（KJ法とセブン・クロス・ワークショップ）（犬塚）		
15	修士論文のアウトラインを考える（犬塚）		
期末			
授業に関する連絡	ポータルサイトででんでんばんで掲示する		
評価方法及び評価基準	各回に与える課題・レポート（50%）、及び発表（50%）を中心に評価する。		
事前・事後学習の内容	質的研究に関しては資料の読み込み、データの収集および分析が事前・事後共に課せられるので十分な準備の上、出席すること		
履修上の注意	リーディングアサイメントは授業初日に提示する。		
テキスト	野村康 2017 「社会科学の考え方」 名古屋大学出版会 9784815808761		
参考文献	「創造の方法学」高根正昭 講談社 2014 「動きながら識る、関わりながら考える」伊藤哲司・能智正博・田中智子著 ナカニシヤ出版		

【予備学習ガイド】

科 目 名	人間学研究法
担 当 者	犬塚 典子・藤原 亮一 (オムニバス)
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>研究方法は人間や社会をどのように捉えるかという「認識論」と連動している。認識論の歴史について基礎的な文献を一読することをお勧めする。研究法には大きく分けて量的研究と質的研究があり、それらを包括的に理解し(リスト①)その上で具体的な調査方法についての知識や技術を習得されたい。テキスト②(これに準じた社会調査入門書も可)の内容理解は予備学習として必要である。</p>
文献リスト	<p>①「人間科学のための混合研究法－質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン」 J. W. クレスウエル、V. L. プラノクラーク 北大路書房</p> <p>②「社会調査の基礎」 北川由紀彦 日本放送出版協会 2015</p> <p>③「アカデミック・スキルズ」 佐藤望 慶應義塾大学出版会 2008</p> <p>④「社会学の方法」 新睦人 有斐閣 2004</p> <p>⑤「質的調査法入門－教育における調査法とケーススタディ」 S. B. メリアム ミネルヴァ書房 2004</p>
その他履修に必要な学習	<p>人間学研究法の講義は、大学学部レベルにおいて研究法(調査法を含む)を一通り学び終えたという前提で行う。したがって、リサーチプロポーザルやレジюмеなどの作成に不慣れな人は、研究作法についての事前学習をお勧めする。これには③、④、⑤に類するテキストが効果的である。</p>

科目名	学び学特論	副題	
担当者	佐伯 胖		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>いわゆる「学習」（動物を含めた生物の行動形成）についての心理学、すなわち学習心理学は、20世紀後半から数度にわたって大きな変革を経てきた。とくに、人間の学習は、過去の学習心理学と決別し、人間学の一領域として新しく生まれ変わり、発展してきている。そのきっかけを作った理論は、「正統的周辺参加論」とよばれている。講義では、この理論をさらに人間学的観点から発展させた「学び学」を提唱する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>「学習」についての科学的研究は、長い間、行動主義心理学の考え方に支配されていたが、それへの根源的批判から、認知心理学、状況論を経て正統的周辺参加論に至っている。講義では、それらの経緯をたどり、人間学的観点からの「学び学」の考え方を習得することを目標とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「勉強」と「学び」		
2	メタ理論—理論のタテ糸・ヨコ糸・ナナメ糸		
3	行動主義とは何か		
4	認知革命とは何か		
5	人工知能と学習科学		
6	認知的徒弟制論		
7	「ダイエット算数」とは何か		
8	状況論革命		
9	正統的周辺参加論		
10	「学校化」のおそろしさ		
11	「学ぶ」ということの意味		
12	考えることの教育		
13	「わかる」ということの意味		
14	「わかり方」の探求（1）		
15	「わかり方」の探求（2）		
期末			
授業に関する連絡	<p>毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。11～15回は当該書籍の1章を読んで、感想を出し合い討議する。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>講義の区切れ目で、レポートを提出する（50%）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50%）。それらを基に総合的に評価する。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。</p>		
履修上の注意	<p>全講義に出席のこと</p>		
テキスト	<p>J. レイヴ&E. ウェンガー著佐伯 胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年</p>		
参考文献	<p>佐伯 胖著『「学び」の構造』東洋館、1975年 佐伯 胖著『イメージ化による知識と学習』東洋館、1978年 佐伯胖ほか著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年</p>		

【予備学習ガイド】

科目名	学び学特論
担当者	佐伯 胖
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	下記文献リストのなかから、特に、事前に、『「学び」を問いつづけて』（佐伯胖著、小学館、2003年）を読んでおくことが望ましい。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①佐伯胖著『「学び」の構造』 東洋館 1975年 ②『考えることの教育』 国土新書 1982年 ③佐伯胖著『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店 1995年 ④佐伯胖著『「わかる」ということの意味 [新版]』 岩波書店 1995年 ⑤佐伯胖著『「学び」を問いつづけて』 小学館、2003年 ⑥佐伯胖著『「わかり方」の探究』 小学館、2004年 ⑦佐伯胖著『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』 東京大学出版会、2014年 ⑧佐伯胖編著『共感－育ち合う保育のなかで－』 ミネルヴァ書房、2007年 ⑨佐伯胖ほか著『こどもを「人間としてみる」ということ』 ミネルヴァ書房、2013年 ⑩ジーン・レイブ, エティエンヌ・ウェンガー著 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』 産業図書、1993年 ⑪ヴァスデヴィ・レディ著佐伯胖訳『驚くべき乳幼児の心の世界―「二人称的アプローチ」から見えてくること』 ミネルヴァ書房、2015年
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」を取り巻く状況に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	保育学特論	副題	
担当者	内藤 知美		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなざしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様で多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。</p> <p>2. 海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	保育のまなざし—教える、教えられる—		
2	子どもか子どもたちかという「問い」		
3	子どもの学びと育ちを捉える（1）発達と育ち		
4	子どもの学びと育ちを捉える（2）社会文化的アプローチ		
5	保育フィールドの構造と理解		
6	遊びを通じた保育（1）事例検討：身体的であること		
7	遊びを通じた保育（2）事例検討：共同的、協働的であること		
8	子どもに対する気づき（1）事例検討：なぜ気づくのか		
9	子どもに対する気づき（2）事例検討：枠組みの再構築		
10	保育における対話と同僚性		
11	保育実践と構造（1）：NZのテファリキの原理		
12	保育実践と構造（2）：NZの学びの物語と評価		
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（1）：学びあい		
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（2）：世代間循環		
15	まとめ：保育の課題と展望		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメを担当者は作成すること。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	鯨岡峻『保育主体として育てる営み』ミネルヴァ書房, 2010年 佐伯胖編『共感—育ち合う保育のなかで—』ミネルヴァ書房, 2007年		
参考文献	J.レイヴ & E.ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書, 1993年 日本保育学会編『保育学講座 I 保育学とは—問いと成り立ち—』東京大学出版会, 2016年		

【予備学習ガイド】

科目名	保育学特論
担当者	内藤知美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育学特論」の授業を履修するために、子どもの「学び」や「育ち」について論じられた文献や、保育にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①泉千勢『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』ミネルヴァ書房, 2017年 ②大場幸夫『こどもの傍らにあることの意味』萌文書林, 2007年 ③佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店, 1995年 ④佐伯胖『「わかる」ということの意味〔新版〕』岩波書店, 1995年 ⑤佐伯胖『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために—〔増補改訂版〕』東京大学出版会, 2014年 ⑥清水博『場の思想』東京大学出版会, 2003年 ⑦津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館, 1989年 ⑧津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房, 1997年 ⑨津守真・森上史朗編『倉橋惣三と現代保育』フレーベル館, 2008年 ⑩高嶋景子・砂上史子・森上史郎編『子ども理解と援助』ミネルヴァ書房, 2011年 ⑪マーガレット・カー著大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房, 2013年 ⑫山岸俊男『信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会, 1998年
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	子ども思想史特論	副題	
担当者	石橋 哲成		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのでしょうか。本講では、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく。今日の子ども観の先駆けとなったのは、ルソーであった。ルソーが「子どもの発見者」と言われる所以である。その後ルソーの影響を強く受けた、ペスタロッチー、さらに「幼稚園」の創立者となったフレーベルや「子どもの家」を創立したモンテッソーリが現れた。それぞれがどのような境遇の中で、どのような子ども観を獲得していったのかを考察する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. ヨーロッパ中世の子ども観はどのようなものであり、それに対して、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、モンテッソーリは、どのような子ども観を獲得していったのかを理解する。 2. その理解の上に立って、受講者各自も自らの子ども観を確固たるものにしていくこと。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション ― 子ども思想史を学ぶ意味		
2	ヨーロッパ中世における人間観・子ども観		
3	ルネッサンス期における人間観・子ども観		
4	近世における子ども観の概観		
5	ルソーにおける子ども観の成立過程		
6	ルソーにおける子ども観と教育観		
7	ペスタロッチーにおける子ども観の成立過程		
8	ペスタロッチーにおける子ども観と教育観		
9	フレーベルにおける子ども観の成立過程		
10	フレーベルにおける子ども観と教育観		
11	モンテッソーリにおける子ども観と教育観		
12	西洋の新教育運動における子ども観と教育観		
13	シュタイナーにおける子ども観と教育観		
14	ランゲフェルトにおける「子ども人間学」		
15	受講生による研究発表：子ども思想史と幼児教育		
期末			
授業に関する連絡	授業は原則として講義形式で行うが、途中で演習形式でも行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。		
テキスト	事前に授業資料を配布する。		
参考文献	<p>ルソー著/今野一雄訳『エミール（上）』/岩波書店/2012（第80刷） ペスタロッチー著/前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』/玉川大学出版部 フレーベル著/小原國芳訳『人の教育』（『フレーベル全集第2巻』）/玉川大学出版部</p>		

【予備学習ガイド】

科 目 名	子ども思想史特論
担 当 者	石橋 哲成
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>「子ども思想史特論」の授業においては、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく予定である。この授業を履修するためには、ヨーロッパの歴史を概観し、とりわけ近世における子ども思想に関する文献を読み、基本的な理解をしておくことが要求される。</p>
文献リスト	<p>①皇至道著『西洋教育通史』／玉川大学出版部／1978</p> <p>②岩崎次男他著『西洋教育思想史』／明治図書／1987</p> <p>③コメンスキー著藤田輝夫訳『母親学校の指針』玉川大学出版部1986β</p> <p>④ルソー著／今野一雄訳『エミール（上）』／岩波文庫／2012（第80刷）</p> <p>⑤ペスタロッチー著／前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』／玉川大学出版部／1987</p> <p>⑥荘司雅子著『フレーベルの生涯と思想』／玉川大学出版部／1975</p> <p>⑦ハイラント著／平野・井出共訳『マリア・モンテッソーリ』／東信堂／1995</p>
その他履修に必要な学習	<p>自分が子どもと接する時、子どもをどのような存在として捉え、どのような言葉掛けをしているのかを振り返ると同時に、電車の中やバスの中、あるいは公園等で、親たちが子どもたちにどのような言葉掛けをしたり、どのような扱いをしているのかを観察して、自分自身の授業に対する問題意識を持つこと。</p>

科目名	保育実践研究	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。		
授業のねらい・到達目標	保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在りようについて探究していくことを目的とする。		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観／自らの枠組みへの気づき～		
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～		
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ／共感的理解を妨げるもの～		
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～		
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～		
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～		
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～		
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～		
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～		
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～		
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～		
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～		
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習においては、受講者全員が、自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行っておくこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。		
履修上の注意	実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合は、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。		
テキスト	岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房, 2013年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社, 2006年		
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013年 鯨岡峻・鯨岡和子著『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2007年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 河邊貴子著『保育記録の機能と役割—保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言—』聖公会出版, 2013年		

【予備学習ガイド】

科目名	保育実践研究
担当者	高嶋 景子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育実践研究」の授業を履修にあたって、保育学や保育実践研究にかかわる基礎文献を読み、理解しておくことが望ましい。
文献リスト	<p>①佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店，1995年 ②佐伯胖『「わかる」ということの意味〔新版〕』岩波書店，1995年 ③佐伯胖『幼児教育へのいざない―円熟した保育者になるために―〔増補改訂版〕』東京大学出版会，2014年 ④佐伯胖『「子どもがケアする世界」をケアする』ミネルヴァ書房，2017年 ⑤津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館，1989年 ⑥津守真『保育者の地平―私的体験から普遍に向けて―』ミネルヴァ書房，1997年 ⑦吉村真理子『保育者の「出番」を考える―今、求められる保育者の役割―』フレーベル館，2001年 ⑧吉村真理子著・森上史朗他編『吉村真理子の保育手帳①保育実践の創造―保育とはあなたがつくるもの―』ミネルヴァ書房，2014年 ⑨高嶋景子・砂上史子・森上史朗編『子ども理解と援助』ミネルヴァ書房，2011年 ⑩佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学編『学校の再生をめざして①学校を問う』東京大学出版会，1993年 ⑪佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『シリーズ学びと文化①学びへの誘い』東京大学出版会，1995年 ⑫佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『シリーズ学びと文化⑥学び合う共同体』東京大学出版会，1996年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	保育者特論	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>子どもが主体となって自ら学ぶプロセスをして展開される保育においては、常に、予想外の出来事が生じ、刻々と状況が複雑に変化していく。保育者は、そのような複雑な状況と対話しつつ、眼前の子どもの思いや課題を丁寧に探り、その育ちを支える関わりや活動の在りようを検討し、実践していくことが求められる。そうした保育者の専門性は、D.ショーンの指摘するように、体系的な知識や法則を適用して問題を解決するような「技術的合理性」によって成り立っているものではなく、「反省的实践家」として、その在りようを読み解いていく必要があると考えられる。本講義では、そうした保育者の専門性について探究するため、まずは、「保育」という営みや、そこでの子どもの学びや育ちを理解するための視座を検討し、それを踏まえて、保育者の専門性と、その専門性の深まりを支える「省察」のプロセスと周囲の関係構造について考察していくこととする。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるための保育者のまなざしの在りようを探ると同時に、それらの「学び」や「育ち」を支える保育実践の構造と、それを実践する保育者の専門性を読み解くための様々な視点を学ぶ。 2. 保育者の専門性が深まっていく過程と、その過程を支える周囲の関係構造について探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	保育者の専門性に関する研究の動向（1）～歴史の変遷を辿る～		
3	保育者の専門性に関する研究の動向（2）～OECD報告等における研究動向～		
4	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（1）～個体能力論から関係論的アプローチへの転換～		
5	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（2）～保育者を取り巻く多様な関係構造への着目～		
6	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（3）～正統的周辺参加論とは～		
7	「保育者になるということ」（1）～「子どもの声を聴く」とは～		
8	「保育者になるということ」（2）～子どもがケアする世界をケアするために：鑑識眼的なまなざし～		
9	「保育者になるということ」（3）～子どもがケアする世界をケアするために：保育における即興性～		
10	「保育者になるということ」（4）～子どもと保育者の相互主体性～		
	保育者の学びを支える多様な対話（1）～省察的实践家としての保育者の専門性～		
12	保育者の学びを支える多様な対話（2）～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～		
13	保育者の学びを支える多様な対話（3）～「省察」を引き出す保育カンファレンスの意義と役割～		
14	保育者の学びを支える多様な対話（4）～対話のもつ「多声性」への着目～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献購読及び実践事例を基にした討議を行うためのレジュメの作成を担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアするということ』ミネルヴァ書房, 2017		
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013 倉橋惣三著『幼稚園真諦』フレーベル館, 1998		

【予備学習ガイド】

科目名	保育者特論
担当者	高嶋 景子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育者特論」の授業を履修するにあたり、子どもの「学び」や「育ち」について論じられた文献や、保育者の子ども理解、保育者の質や専門性に関する基礎文献を読み、理解しておくことが望ましい。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店, 1995年 ②佐伯胖『「わかる」ということの意味〔新版〕』岩波書店, 1995年 ③佐伯胖編著『共感—育ち合う保育のなかで—』ミネルヴァ書房, 2007年 ④佐伯胖『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために—〔増補改訂版〕』東京大学出版会, 2014年 ⑤津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館, 1989年 ⑥津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房, 1997年 ⑦吉村真理子『保育者の「出番」を考える—今、求められる保育者の役割—』フレーベル館, 2001年 ⑧吉村真理子著, 森上史朗他編『吉村真理子の保育手帳①保育実践の創造—保育とはあなたがつくるもの—』ミネルヴァ書房, 2014年 ⑨津守真・森上史朗編『倉橋惣三と現代保育』フレーベル館, 2008年 ⑩高杉自子著子どもと保育総合研究所編『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房, 2006 ⑪高嶋景子・砂上史子・森上史朗編『子ども理解と援助』ミネルヴァ書房, 2011年 ⑫青山誠『あなたも保育者になれる』小学館, 2017年 ⑬大宮勇雄『保育の質を高める』ひとなる書房, 2006年 ⑭大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	子ども・子育て支援実践研究	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	子ども・子育て支援の実践について、前半は、OECD諸国の動向について把握し、カナダの事例を分析する。後半は、日本の新聞、自治体広報など各種メディアの記事を共同で分析し、子育て支援実践のための理論、政策、財政のありかたについて検討する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 海外における施策や実践との比較から、日本の子ども・子育て支援制度の内容について理論的・実証的に分析する視点を身につける。 3. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。 		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション（ガイダンスおよび課題研究について）		
2	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（1）		
3	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（2）		
4	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（3）		
5	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（1）全日制幼稚園		
6	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（2）学童保育		
7	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（3）父親休業		
8	日本の子ども・子育て支援政策の変遷ならびに現状		
9	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（1）幼稚園・保育所		
10	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（2）認定こども園		
11	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（3）事業所内保育施設		
12	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（4）病児・病後児保育		
13	日本の政策事例に対する討議（1）		
14	日本の政策事例に対する討議（2）		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	でんでんばんを通して連絡する。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	国内の政策や実践例について情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を参照しつつ各自の課題研究を進めること。		
履修上の注意	課題発表のために授業時間外での研究調査を必要とする。		
テキスト	配布資料を中心に進める。		
参考文献	OECD『OECD保育白書』明石書店、2011年。		

【予備学習ガイド】

科 目 名	子ども・子育て支援実践研究
担 当 者	犬塚 典子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	子ども・子育て支援に関する理論的文献を読むこと。また、公的機関や民間団体による公表資料や報告書によって情報収集を行うこと。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①厚生労働省『厚生労働白書』各年版 ②内閣府『少子化対策白書』各年版 ③OECD編『国際比較：仕事と家族生活の両立』明石書店，2009年 ④秋田喜代美監修『あらゆる学問は保育につながる—発達保育実践政策学の挑戦』東京大学出版会，2016年 ⑤椋野美智子・藪長千乃編『世界の保育保障—幼保一体改革への示唆』法律文化社，2012年 ⑥池本美香編『子どもの放課後を考える—諸外国との比較でみる学童保育問題』勁草書房，2009年 ⑦泉千勢編『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか：子どもの豊かな育ちを保障するために』ミネルヴァ書房，2017年
その他履修に必要な学習	国内外の子ども・子育てや保育を取り巻く問題についての情報（特に、内閣府，文部科学省，厚生労働省，OECDのウェブサイトにある公表資料）の収集を行い，自分自身の研究課題を認識すること。

科目名	児童家庭福祉特論	副題	
担当者	太田 由加里		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	人間の一生を生命の誕生から死にいたるまでと捉え、特に乳幼児期から18歳未満までの子どもの福祉問題に焦点をあてる。広く社会構造の中で子ども・家族・地域をとらえ直し、専門職として求められる役割と機能、援助について社会福祉の観点から省察を深める。具体的には近年増加する児童虐待やいじめ、不登校、ひとり親の生活上の困難、障害児の療育などである。それらの事象から社会的存在としての子どもを理解し、子どもを取り巻く家族の生活上の困難を把握する。具体的な事例を基に実践の検討から実践を研究対象とするために必要な理論を学び検証する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子ども人間学を学ぶうえで必要な社会的存在としての子どもを理解し子どもが抱える生活上の困難を把握する。 2. その困難を解決するために必要な教育や法制度などを学ぶ。 3. 社会経済的変化が子どもに与える影響を事象を通して理解する。 4. 日常的な子どもに関わる福祉実践を検討することから始め、それを研究の対象へとシフトさせるために必要な理論を探索、講読、その学識を身につける。 5. それらの理論が実践とどのように結びつき、日常の実践に活かせるのか、理論と実践の往還の意義を学ぶ。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー少子高齢社会と児童家庭福祉		
2	子どもを取り巻く社会的状況①日本及び諸外国の子どもたち		
3	子どもを取り巻く社会的状況②家族と地域における子どもたち		
4	児童家庭福祉をめぐる法制度①児童福祉六法や最新の動向		
5	児童家庭福祉をめぐる法制度②児童福祉関連法（学校教育法や社会保障法など）		
6	児童家庭福祉の関係機関①児童相談所や児童福祉施設、学校などとの連携を実践事例を通して討議する		
7	児童家庭福祉の関係機関②福祉事務所や社会福祉協議会などとの連携を実践を通して討議する		
8	児童虐待の現状と支援～最新の報告書や事例を基に討議する		
9	不登校・いじめ・ひきこもりの現状と支援～事例を基に子どもや家族への対応について考える		
10	ひとり親家庭（母子・父子家庭）への支援～事例を基に子どもや家族への対応について考える		
11	障害児の療育と特別支援教育～事例を基に子どもや家族への対応について考える		
12	次世代育成支援（子ども・子育て関連法や施策）の現状と課題		
13	教育と福祉を繋ぐスクールソーシャルワーカーの役割～チーム学校で期待される役割を理解する		
14	諸外国における児童・家庭福祉の施策		
15	総括		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式を用い、受講者の実践事例や各テーマに関する最新の報告書などを教材に討議を中心に展開する。		
評価方法及び評価基準	授業内の討論（30%）と課題（レポート）（70%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前学習：次回のテーマや内容について参考文献などで概略を把握すること。 事後学習：授業の振り返りを行い、自己の問題関心に照らして省察すること。		
履修上の注意	各自の関心領域に対し探究心を持って、授業内の討論に積極的に参加すること。		
テキスト	特に指定しない。履修者の問題関心に合わせた文献や資料を用意する。		
参考文献	阿部彩（2014）『子どもの貧困Ⅱ－解決策を考える』岩波新書1467 アマルティア・セン 大石りら訳（2002）『貧困の克服』集英社新書 大溝茂・太田由加里編（2017）『児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度』電気書院		

【予備学習ガイド】

科 目 名	児童家庭福祉特論
担 当 者	太田 由加里
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>児童に関する新聞記事やニュースなどに興味と関心を持って子どもがおかれている立場や環境についての理解を深めておくこと。また地域の中で出会う子どもたちや親子の様子を観察するなど子どもがどういうことに興味を持っているのか、どんな言葉やしぐさで自己表現しているかなどに留意して見ること。また子どもと一緒にいる保護者の言葉かけや表情などについても見ること。子どもが興味を持っている本やアニメ、スポーツなど現代の子どもを理解するうえで子どもの文化にも興味を持たれたい。また児童虐待や子どもの自殺、事故などについても把握し、そのとき子どもはどのような環境におかれていたのかを考えること。子どもや保護者を善悪の判断でとらえるのではなく、社会的人間としての立場や環境を類推する力をつけておかれたい。また自分が考えていることを自分の言葉で表現できるように日頃から表現力を磨いておくこと。</p>
文献リスト	<p>①阿部彩『子どもの貧困-日本の不公平を考える』岩波新書1157 (2008) ②アマルティア・セン 池本幸生他訳 『不平等の再検討』岩波書店 (2006) ③一瀬早百合『障害のある乳幼児と母親たち その変容プロセス』生活書院 (2012) ④太田由加里『子どもを虐待死から守るために-妊婦健診・乳幼児健診未受診者から見えること』ドメス出版 (2011) ⑤藤本典裕・制度研『学校から見える子どもの貧困』大月書店 (2009) ⑥乾美紀・中村安秀『子どもにやさしい学校-インクルーシブ教育をめざして』ミネルヴァ書房 (2009) ⑦社会政策学会編『子育てをめぐる社会政策』法律文化社 (2008) ⑧籠山京『大都市における人間構造』東京大学出版会 (1981) ⑨上野千鶴子『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』太田出版 (2011) ⑩杉村宏『格差・貧困と生活保護「最後のセーフティネット」の再生に向けて』(2007) ⑪岩田正美『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房 (1995) ⑫一番ヶ瀬康子『児童福祉論』有斐閣双書 (1975) ⑬藤原里佐『重度障害児家族の生活』明石書店 (2006) ⑭月田みづえ『日本の無国籍児と子どもの福祉』明石書店 (2008) ⑮山縣文治『児童相談所で出会った子どもたち』ミネルヴァ書房 (1999)</p>
その他履修に必要な学習	<p>上記に記したように事前、あるいは並行して学ぶ内容を読み、文献リストの中から興味のある文献を選んで読んでください。またそれらのリストでどのような題目に魅かれるのか、ご自身の興味及び問題関心なども把握しておいてください。</p>

科目名	家族社会学特論	副題	
担当者	小玉 亮子		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>アリエスの研究を嚆矢として家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、それまでの家族を本質から語るような議論ではなく、家族を社会的構築物としてみ直す、いわゆる家族社会学のパラダイム転換が起こった。そして、そこから近代以降子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。しかし、近代以降の家族と学校はいつでも期待される機能を十全に果たし得るとは限らない、家族と学校はそれぞれ課題に直面し、両者の関係は、複雑に問題を抱えることとなった。こういった家族と学校の複雑な関係に焦点を当てて、家族の問題について社会学的に分析する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>社会的な家族認識を学び、家族をマクロな視点及びミクロな視点から分析することによって、自らが無意識のうちにもつ家族観が普遍のものではないことを学び、自らの家族観を相対化することを試みる。同時に、家族について学校や地域との関係に焦点を当てて、家族が単独のシステムとしてあるのではなく、様々なシステムと相互的に存在していることを理解する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション — 家族社会学のパラダイム転換を受けて		
2	近代家族とは何か		
3	家族の危機と年齢段階		
4	家族と学校・地域との関係		
5	連携とパートナーシップ		
6	社会変動と教育改革		
7	新しい能力観と子育て		
8	家族の課題を考える		
9	家族の不安		
10	家族の期待		
11	家族と参加		
12	教師からみた家族 (1)		
13	教師からみた家族 (2)		
14	ジェンダーと家族		
15	これからの家族の課題を考える		
期末			
授業に関する連絡	<p>社会における家族イメージを知るために、メディアによる家族に関する報道などに注意しておくことは授業を受ける上で有益となる。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>授業への参加及び、小レポートと研究発表を元に総合的に評価する。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>事前に授業前の課題を伝えるので、その課題に取り組むこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。</p>		
履修上の注意	<p>各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。</p>		
テキスト	小玉亮子編『接続期の家族・園・学校』東洋館出版社		
参考文献	<p>藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房 アリエス (1980) 『子どもの誕生』みすず書房</p>		

【予備学習ガイド】

科 目 名	家族社会学特論
担 当 者	小玉 亮子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>家族について学ぼうとするときに、ともすれば、自分の育ってきた家族を暗黙のうちに想定し、そこから家族に関する議論を組み立てがちになる。家族社会学において求められることは、まず、自らの家族概念の相対化であり、そのためには、比較の視点が有効となる。過去と現在、日本とヨーロッパといったように、時間的な比較・空間的な比較をおこなうことで、異質な文化や異質な社会に出会い、自らの相対化を行うことができる。そのためには、以下の文献リストに挙げられている文献や、そのほか、メディアで報道されている家族に関する報道などに日常的に目を通すことが望ましい。</p>
文献リスト	<p>授業のテキストは、 小玉亮子編（2017）『幼小接続期の家族・園・学校』東洋館出版社 であるが、このほか、以下の文献を推薦する。</p> <p>①落合恵美子（2004）『21世紀家族へー家族の戦後体制の見かた 超えかた』有斐閣。</p> <p>②木村涼子・小玉亮子（2005）『教育/家族とジェンダーで語れば』白澤社。</p> <p>③広井多鶴子・小玉亮子（2010）『現代の親子問題ーなぜ親と子が問題なのか』日本図書センター。</p> <p>④藤崎宏子・池岡義孝編（2017）『現代日本の家族社会学を問う：多様化のなかの対話』ミネルヴァ書房。</p>
その他履修に必要な学習	<p>多様なメディアが「家族」をどのようにとりあつかっているのかを社会的言説として捉え直すことが重要であり、特にニュースなど報道を重視しているが、そのほか、映画やテレビのドキュメンタリーといった映像作品から示唆をえることができる。その際、日本のみならず、イスラム圏のドキュメンタリーやインドなど南アジアの映画など異文化のものも有益である。</p>

科目名	子ども政策特論	副題	
担当者	渡邊 英則		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	平成27年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わった。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱になっている。また平成30年度からの学習指導要領改訂の動きは、小中学校の学習指導要領の改訂だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園も含め、日本の教育のあり方を大きく変えようとする改訂になっている。少子化対策や待機児童対策、地方分権、子育て支援の充実など、教育・保育施策全体を、国や地方が地域の実態に合わせたものにしていくとする動きも活発である。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、ではどのように園やクラスを運営し、どのように教育や保育を行っていけばいいかを探求していくことにする。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。新たにできる制度は子どもを本当に大事にする社会を実現しようとする制度となっているのか、園や保育者はどんな子どもを育てようとしていて、その営みを支える制度となっているのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	OECDの調査・提言について～世界の乳幼児教育の流れを中心に～		
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～		
4	学習指導要領の改訂について		
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題		
6	保育園制度の基本的な考え方と課題		
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～		
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～		
9	認定こども園制度について（3）～認定こども園保育要領を読み解く～		
10	子育て支援について		
11	幼保小連携について		
12	特別支援教育について		
13	海外の保育制度について		
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にして自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	『保育白書2015』ひとなる書房、全国保育団体連絡会・保育研究所編（※その年度の最新のものを使用する） OECD保育白書―人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較 明石書店 2011年		
参考文献	佐伯胖ほか著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年 マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房、2013年		

【予備学習ガイド】

科 目 名	子ども政策特論
担 当 者	渡邊 英則
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「子ども政策特論」の授業を履修するために、内閣府で開催されている子ども・子育て会議の資料や、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂、文部科学省の中央教育審議会で行われている幼稚園教育要領の改訂、厚生労働省で行われている保育所保育指針の改定等について、ある程度理解しておくことが望ましい。
文献リスト	<p>①池本美香『失われる子育ての時間—少子化社会脱出への道』勁草書房、2003年</p> <p>②仙田満『子どもとあそび—環境建築家の眼—』岩波新書、1992年</p> <p>③佐伯胖『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために—（増補改訂版）』東京大学出版会、2014年</p> <p>④泉千勢、汐見稔幸、一見真理子 『世界の幼児教育・保育改革と学力（未来への学力と日本の教育）（未来への学力と日本の教育（9））』明石書店、2008年</p> <p>⑤中室牧子『学力の経済学』、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年</p> <p>⑥河合隼雄『Q&Aこころの子育て—誕生から思春期までの48章』朝日文庫、2001年</p> <p>⑦高杉自子『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房、2006年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	教育学特殊研究	副題	
担当者	石橋 哲成・吉國 陽一 (オムニバス)		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>本年度の「教育学特殊研究」においては、ドイツとロシアの2つの国の教育学・心理学の文献を読むことによって、教育学的視野を広げることを目指したい。授業の前半においては、ドイツの教育学者、ボルノーの『教育を支えるもの—教育関係の人間学的考察—』（原題は“Die paedagogische Atmosphaere”）を読み進める。教育がうまくいくかどうかの鍵は、子どもと教育者の間の教育的関係がうまくいかにかかっていると一言で言っても過言ではない。教育的関係をボルノーに従って、子どもと教育者の両方から考察していく。</p> <p>授業後半においては革命期におけるロシアの心理学者、レフ・ヴィゴツキーの心理学を文献購読を通じて学ぶ。ヴィゴツキーの心理学においては子どもの学習と発達を社会的関係を通して獲得される文化を中心軸として理解する。また、事物を運動の過程において理解する弁証法的な視点から、子どもは他者と文化との接点において常に「発達しつつある存在」として理解される。ヴィゴツキーの心理学を学ぶことを通して、子どもを理解する新たな視座を獲得することを目指す。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボルノーは「子どもの被包感」についてどのように捉えているのかを理解する。 2. 教育的関係を良好なものにするために、教育者に必要なものは何かを吟味する。 3. ヴィゴツキーの心理学に触れることを通して、他者と文化との接点において常に「発達しつつある存在」として子どもを理解する視点を手に入れる。 4. ヴィゴツキーの心理学の観点から教授-学習や子どもの遊びといった事象を理解する。 		
1	ボルノーの教育的思索の概要		
2	子どもの被包感の大切さ		
3	子どもの気持ち（快活・朝のよう感情・期待の喜ばしさ）		
4	子どもの徳性（感謝・従順・愛・尊敬）		
5	教育者の子どもへの信頼		
6	教育者の徳性（教育愛・期待・忍耐・希望）		
7	円熟した教育者の基本的態度（清明・ユーモア・善意）		
8	ヴィゴツキー心理学の概要		
9	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学①-人間を人間たらしめるもの-		
10	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学②-ヴィゴツキーの研究手法-		
11	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学③-高次精神機能とその社会的起源-		
12	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学④-高次精神機能の発達の観点から見た書き言葉の前史-		
13	ヴィゴツキーの障害児教育論		
14	ヴィゴツキーの遊び論		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は演習形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	ボルノウ著、森・岡田共訳『教育を支えるもの—教育関係の人間学的考察—』／黎明書房／1971 ヴィゴツキー、L.S.（柴田義松 訳）『文化的-歴史的な精神発達の理論』 学文社 2005年 柴田義松『ヴィゴツキー入門』，寺子屋新書，2006年		
参考文献	ボルノー著、石橋哲成訳『思索と生涯を語る』／玉川大学出版部／1991		

【予備学習ガイド】

科目名	教育学特殊研究
担当者	石橋 哲成・吉國 陽一 (オムニバス)
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「教育学特殊研究」の授業を履修するために、「教育学」の基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①藤田英典 『教育学入門（子どもと教育）』、岩波書店、1997年</p> <p>②村井実 『教育学入門 上下』、講談社、1983年</p> <p>③中内敏夫 『教育学第一歩』、岩波書店、1988年</p> <p>④田中・今井 『キーワード 現代の教育学』、東京大学出版会、2009年</p> <p>⑤プラトン、藤沢令夫訳 『メノン』、岩波書店、1994年</p> <p>⑥J. ルソー、今野訳 『エミール』、岩波書店、1962年</p> <p>⑦J. デューイ、市村尚久訳 『学校と社会・子どもとカリキュラム』、講談社学術文庫、1998年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「教育」をめぐる課題に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	子どもとアート論	副題	
担当者	安村 清美・斉木 美紀子 (オムニバス・一部共同)		
開講期	前期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに、実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子どもの期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。</p> <p>安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。</p> <p>斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。</p> <p>その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。</p> <p>2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「子どもとアート」について (人間としての子どもの期のアート経験の意味) (安村・斉木)		
2	教育現場とアーティストの関わり①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について (安村)		
3	教育現場とアーティストの関わり②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション (安村)		
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む (安村)		
5	表現する身体：表現とプロセス、作品—実践記録、論文を読む (安村)		
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション		
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告		
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び (斉木)		
9	子どもと音環境 (斉木)		
10	子どもとうた (斉木)		
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる (斉木)		
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども (斉木)		
13	文化と子ども (斉木)		
14	課題のディスカッション・プレゼンテーション (安村・斉木)		
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評 (安村・斉木)		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。		
評価方法及び評価基準	授業内での発言 (20%)、プレゼンテーション (40%)、レポート (40%) などを基に総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出会ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。		
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	<p>『松本千代栄撰集 2 人間発達と表現』舞踊文化と教育研究の会 (編者代表：安村清美) 編、2007、明治図書</p> <p>『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館</p> <p>『子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003 東京大学出版会</p> <p>『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会</p> <p>『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社</p>		

【予備学習ガイド】

科目名	子どもとアート論
担当者	安村 清美・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの表現やアート教育について自ら関心を持ち、積極的に実際の保育現場や社会文化としてのアートに触れる機会を作ること。 ・子どもが何かを創り出すときの、発想・技術・プロセス・作品の関係について考えること。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①『芸術の意味』ハーバート・リード滝口修造訳 みすず書房 1990 ②『幼児期—子どもは世界をどうつかむか』岡本夏木 岩波新書 2005 ③『遊びと人間』ロジェ・カイヨワ 講談社 1990 ④『遊びの発達学 基礎編』高橋、中沢、森上共編 倍風館 1996 ⑤『遊びの発達学 展開編』高橋、中沢、森上共編 倍風館 1996 ⑥『遊びとわらべうた—子どもの文化の見直し』永田栄一 青木書店 1982 ⑦『子どもは美をどう体験するか』K. モレンハウアー 玉川大学出版部 2001 ⑧『子どもの表現を見る、育てる』今川、宇佐美、志民編 文化書房博文社 2005 ⑨『音楽する子どもをつかまえない』小川、今川編 ふくろう出版 2008 ⑩『美学事典』竹内敏雄編 弘文堂 1966 ⑪『驚くべき学びの世界』佐藤学監修、東京カレンダー株式会社、2011 ⑫『子どもとアート』小学館。2013
その他履修に必要な学習	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが何かを創り出すときの、発想・技術・プロセス・作品の関係について、上記文献リストの講読や子どもと共にある実践を通して考えること。

科目名	子どもとことば論	副題	多文化共生時代の子どもとことば		
担当者	内藤 知美				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる多様な事例を通して、子どもの生活や遊びと大人—子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのか、関係論的視点から検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また児童文化財を含めた「モノ」を有効に活用し、実際の保育において子どものことばを育てる保育者としての実践力を探究する。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもが多様ななかかわりの中でことばを獲得していく過程について理解を深める。特に子どもが主体的にことばを使用することの意味を問う。 2. ことばをめぐる最新の理論に触れると同時に、具体的な事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を捉え、支援する具体的、実践的方法を学ぶ。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	子どもとことばの関係性				
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境				
3	ことばの発達と保育（0歳期）				
4	ことばの発達と保育（1語発話の時期）				
5	ことばの発達と保育（2語発話の時期）				
6	ことばの発達と保育（2歳期・3歳期）				
7	ことばの発達と保育（4歳期・5歳期）				
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①—多文化・多言語と子ども				
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②—ことばとコミュニケーション（ビデオカンファレンスを通して）				
10	事例検討：同調、リズムとことば				
11	事例検討：共感性とことば				
12	事例検討：創造性や思考とことば				
13	ことばを育てる児童文化財の活用①—絵本などの文化財が育むことば				
14	ことばを育てる児童文化財の活用②—文化財を用いたことばの育ちあい				
15	子どものことばと視聴覚メディア				
期末					
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	小論文（レポート）70%、児童文化財の実践 30%				
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる最新の理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること				
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「ことば」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。				
テキスト	今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書、2013年、幼稚園教育要領（平成29年告示）、保育所保育指針（平成29年告示）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）				
参考文献	岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書1982）、麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社1992）青木保『異文化理解』（岩波新書2001）、佐伯胖『共感』（ミネルヴァ書房2007）、今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書2010）など授業中に適宜指示する。				

【予備学習ガイド】

科目名	子どもとことば論
担当者	内藤 知美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもとことば論」の授業を履修するために、「ことばの発達」に関する基礎理論を深めておくこと。 ・保育におけることばの発達を促す環境・文化を理解するために、保育現場でのフィールドワークを行い、実践的理解を深めること。 ・絵本などの児童文化財作品の実演を通して、子どもとの双方向のコミュニケーションのあり方について考えること。
文献リスト	<ol style="list-style-type: none"> ①岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書 1982） ②やまだようこ『ことばの前のことば』（新曜社 1987） ③内田伸子『子どもの文章』（東京大学出版会 1990） ④麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社 1992） ⑤浜田寿美男『意味から言葉へ』（ミネルヴァ書房 1995） ⑥青木保『異文化理解』（岩波新書 2001） ⑦正高信男『子どもはことばをからだで覚える—メロディから意味の世界へ』（中公新書 2001） ⑧岡本夏木『幼児期—子どもは世界をどうつかむか』（岩波新書 2005） ⑨脇明子『読む力は生きる力』（岩波書店 2005） ⑩佐伯胖『共感—育ち合う保育のなかで—』（ミネルヴァ書房 2007） ⑪NPOブックスタート編著『赤ちゃん絵本をひらいたら—ブックスタートはじまりの10年』（岩波書店 2010） ⑫今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書 2010） ⑬脇明子『子どもの育ちを支える絵本』（岩波書店 2011） ⑭世界とつながる子どもの本棚プロジェクト編『多文化に出会うブックガイド』（読書工房 2011） ⑮今井むつみ・針生悦子『言葉をおぼえるしくみ』（筑摩書房 2014）
その他履修に必要な学習	<p>子どもとことばの関係について、「多文化共生」の視点をもって、積極的にフィールドワークを行うこと。また絵本や紙芝居などの児童文化財について理解を深め実践力を育てるとともに子どもとことばを取り巻く文化のあり方について自ら考えること。</p>

科目名	子ども環境学特論	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。</p> <p>子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>学生が、子どもがひと・もの・空間などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等の保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	子ども環境学とは何か － 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは		
2	子どものあそび環境 － 時間、空間、集団、方法～遊環構造、こども時代のあそび環境		
3	子どものための安全環境 － あそび環境におけるリスクとハザード		
4	子どもと保育環境（1） － 幼稚園、保育園、認定こども園の園舎環境		
5	子どもと保育環境（2） － 幼稚園、保育園、認定こども園の園庭環境		
6	子どもと住環境 － 子どもの住まいの環境		
7	子どもと学校環境 － 小学校環境と幼保小連携の可能性		
8	子どもの感性を育む環境 － 保育実践におけるアート、表現と環境		
9	子どもと癒しの環境 － 自然等の癒し環境		
10	子どもの地域施設環境 － 園外保育、子育て施設等の環境		
11	子どもと環境学習 － 自然、環境への気づきから持続発展教育へ		
12	子どものための都市・まちづくり － 子どもにやさしいまちの在り方に向けて		
13	幼児教育施設等の視察（1） － 認定こども園：園舎、園庭		
14	幼児教育施設等の視察（2） － 幼稚園：園舎		
15	幼児教育施設等の視察（3） － 幼稚園：園庭遊具、ビオトープ		
期末			
授業に関する連絡	でんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	各授業での発表（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。		
事前・事後学習の内容	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じたようにあるべきかを考察してほしい。		
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。		
テキスト	特に使用せず。		
参考文献	仙田満『子どもとあそび』岩波新書、1992年／仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社、2003年／仙田満『環境デザインの方法』彰国社、1998年／仙田満『環境デザイン講義』彰国社、2006年／仙田満『こどもの庭』世界文化社、2015年		

【予備学習ガイド】

科目名	子ども環境学特論
担当者	仙田 考
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「子ども環境学特論」の講義履修に際し、子どもの環境についての関連文献を読み、理解を深めること。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①仙田満「子どもとあそび」岩波新書 1992年 ②仙田満「こどものあそび環境」鹿島出版会 2009年 ③仙田満「幼児のための環境デザイン」世界文化社 2003年 ④仙田満「環境デザインの方法」彰国社 1998年 ⑤仙田満「環境デザインの展開」鹿島出版会 2002年 ⑥仙田満「こどもの庭」世界文化社 2015年 ⑦森上史朗編著「これからの保育環境づくり」世界文化社 1999年 ⑧住宅総合研究財団住教育委員会編著「まちはこどものワンダーランド」風土社 ⑨英国教育科学省編 IPA日本支部訳「アウトドアクラスルーム」公害対策技術同友会 1994年 ⑩吉永元孝ほか編「園芸療法のすすめ」創森社 1998年 ⑪門脇厚司「子どもの社会力」岩波新書 1999年
その他履修に必要な学習	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じたものようにあるべきかを考察してほしい。

科目名	発達心理学特論	副題	
担当者	横尾 暁子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	人間の生涯にわたる発達・成長のなかで、人生初期はその基盤となる重要な時期であると考えられている。本授業では、主に乳幼児期・児童期の子どもの心理学的発達をテーマとして扱う。授業では、国内及び海外における研究成果として論文を紹介する。受講者は論文を読み概要をまとめた上で自分の考察や問題意識とともに発表し、それに基づいて討議を行う。		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・発達心理学の最新の研究成果を学び、子どもの発達や子どもとの関わりについて深く思考し、子どもに対する多面的な理解を深める。 ・子どもの生涯の発達を見通し支えるために、発達心理学の研究成果を実践の場で応用する力を身につける。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	心理学の研究法（実験、観察、調査、事例研究）		
3	研究計画と心理統計		
4	発達の基盤-遺伝と環境		
5	愛着の発達		
6	認知発達-表象の発達と概念の発達-		
7	認知発達-言語発達と社会的認知の発達-		
8	自己認知の発達		
9	道徳性と向社会的行動の発達		
10	問題解決行動の発達		
11	仲間関係の発達		
12	親子関係の発達-養育態度と発達-		
13	食行動の発達		
14	保育者と子どもの関係		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は内容に応じて、講義と演習の両形式で行う。演習は、発表と討議を予定しており、履修生に資料作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内での発表および討議（50%）、課題の提出（50%）に基づいて評価する。		
事前・事後学習の内容	<p>事前：各回の授業のテーマについて、関連する基礎的な知識を確認し、自分の考えをまとめておくこと。また、配布資料や指定の文献等はよく読んでおくこと。発表担当の場合は、資料を準備すること。</p> <p>事後：各回の学習内容を整理して、学期末の課題作成の準備につなげること。各自の問いや疑問点についてはさらに調べるなどして、学びを自ら深めていくことが望ましい。</p>		
履修上の注意	履修生の積極的な参加を求める。		
テキスト	特に使用せず。		
参考文献	杉村伸一郎・坂田陽子 『実験で学ぶ発達心理学』 ナカニシヤ出版 2004 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎 『原著で学ぶ社会性の発達』 ナカニシヤ出版 2008 山口真美・金沢創編著 『心理学研究法4 発達』 誠信書房 2011		

【予備学習ガイド】

科目名	発達心理学特論
担当者	横尾 暁子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	受講には心理学（特に発達心理学）の基礎的な知識が必須となるため、事前に確認しておくことが必要である。また、心理学論文を理解するために、授業と並行して心理学の研究法や統計的手法についても学ぶことが望まれる。
文献リスト	<p>①山本真由美編著 『発達心理学をアクティブに学ぶ』 北大路書房 2017</p> <p>②清水由紀・林創編著 『他者とかかわる心の発達心理学』 金子書房 2012</p> <p>③岡本依子・菅野幸恵 『親と子の発達心理学』 新曜社 2008</p> <p>④遠藤利彦・坂上裕子編 『事例から学ぶはじめての質的研究法 生涯発達編』 東京図書 2007</p> <p>⑤Robert L. Solso & Homer H. Johanson 『心理学実験計画入門』 学芸社 2002</p> <p>⑥渡部洋編著 『心理統計の技法』 福村出版 2002</p> <p>⑦伊東暁子・竹内美香・鈴木晶夫 『食べる・育てる心理学』 川島書店 2010</p>
その他履修に必要な学習	心理学研究についてはもちろん、隣接諸領域についても調べてみるなど、各人の関心について、積極的に学びを広げ、深めていくことが望まれる。

科目名	保育・教育課程研究	副題	
担当者	宮里 暁美		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく循環のプロセス等について、事例やDVDを通して検討する。また、子どもとの対話的な関係の中から「学びの経験（履歴）」を編み出していくために必要な視点について、文献と実践を通して検討する。さらに、国内外の特色のある保育・教育課程について分担して調べ発表する。その内容を検討し、特色や相違点、共通点を整理する。また、グループディスカッションや全体討議の場面を多く設定し、学びを深めていく。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントについて整理する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。 		
授業の方法・授業計画			
1	講義 保育の基本と計画：カリキュラムとは何か		
2	講義 保育の基本と計画：保育・教育課程・全体的な計画の意義		
3	講義 保育の基本と計画：遊びの中の学びを捉える		
4	文献研究「子どもの世界の探求」① 子どもが感じる世界を感じる		
5	文献研究「子どもの世界の探求」② 子どもと共に過ごすことの意味を考える		
6	文献研究「子どもの世界の探求」③ 保育と営みについて考える		
7	保育観察① 保育の実際の中に身をおいたからこそその気づきをまとめる		
8	保育観察② 保育の実際の中に身をおき、自己課題に応じた学びを深める		
9	発表・討議 保育の実際から気づいたことについて		
10	発表・討議 保育の実際の中にある意味を深める		
11	発表・討議 保育とは何か？		
12	講義 国外の特色ある保育・教育課程		
13	討議 様々な保育・教育課程の違いと共通点から見えたこと		
14	討議 豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について		
15	講義 学びの振り返りとまとめ（課題レポート提出）		
期末			
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	事例分析や討議への参加意欲：40% 資料準備及び提案内容：30% 課題レポート：30%		
事前・事後学習の内容	事前：特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う 事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。		
履修上の注意	特になし		
テキスト	津守真・浜口順子編著『新しく生きる～津守真と保育を語る』フレーベル館、2009年 宮里暁美著『子どもたちの四季～小さな子をもつあなたに伝えたい大切なこと』主婦の友社、2014年 津守真著『子どもの世界をどうみるか 行為とその意味』NHKブックス1987年		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2008年 吉村真理子著『保育実践の創造』ミネルヴァ書房、2014年		

【予備学習ガイド】

科目名	保育・教育課程研究
担当者	宮里 暁美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育・教育課程研究」の授業を履修するために、保育学や保育実践にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①津守真・浜口順子編『新しく生きる―津守真と保育を語る―』フレーベル館、2009年</p> <p>②津守真『私が保育を志した頃』ななみ書房、2012年</p> <p>④津守真『保育の現在―学びの友と語る―』萌文書林、2013年</p> <p>⑤津守真『保育者の地平―私的体験から普遍に向けて―』ミネルヴァ書房、1997年</p> <p>⑥深澤直人『デザインの輪郭』TOTO出版、2008年</p> <p>⑦室田一樹『保育の場に子どもが自分を開くとき』ミネルヴァ書房、2013年</p> <p>⑧宮里暁美『子どもたちの四季』主婦の友社、2013年</p> <p>⑨ジャンニ・ロダーニ『ファンタジーの文法～物語創作法入門』ちくま文庫、1990年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題を把握するとともに、様々な保育実践の実際について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	権利擁護特論	副題	
担当者	國見 真理子・長谷川 洋昭（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>本講義では、複雑化する社会における子どもたちの権利擁護に関する知識を深め、質の高い実践力を養うことを目的とする。ここでは人間の尊厳の保持、権利擁護活動の支援等の視点を重視する。</p> <p>國見担当の総論では、人間尊重を巡るリーガルマインドの理解を深めることを目指す。権利擁護制度概要、憲法上の基本的人権、その他関連法規を把握し、子どもを巡る権利擁護に関する事例研究を行う。</p> <p>長谷川担当の各論では、履修者が関心のある領域を設定し、具体的事例に基づき現状と課題を明確化する。権利擁護に係わる関係機関・者のジレンマの正体は何か、その理論的理解を目指す。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 権利擁護の現状と課題を、具体的実践事例に基づき理解する。 2. 文献・資料の検索と収集、分析手法の習得を並行しつつ、権利擁護に関連する制度・関係機関・者のあるべき姿を具体的に理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション（國見・長谷川）		
2	憲法①：権利擁護と人権（國見）		
3	憲法②：権利擁護と子どもを巡る人権条約（國見）		
4	民法①：権利擁護と民法（國見）		
5	民法②：家族法（國見）		
6	行政法と権利擁護（國見）		
7	事例研究①（國見）		
8	事例研究②（國見）		
9	権利擁護と専門職（長谷川）		
10	児童虐待と権利擁護（長谷川）		
11	社会的排除と権利擁護（長谷川）		
12	施設内虐待と権利擁護（長谷川）		
13	事例研究①（長谷川）		
14	事例研究②（長谷川）		
15	総括（長谷川）		
期末			
授業に関する連絡	「でんでんばん」を通じて履修者に適宜連絡する。		
評価方法及び評価基準	期末課題（40%）、コメントシート（30%）及び授業内の活動（30%）を総合的に勘案し評価する。		
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること。		
履修上の注意	人権擁護に対する理解を深めるために、六法を授業の際に持参することを求める。		
テキスト	総論：最新版の『ポケット六法』（有斐閣） 各論：講義中に適宜資料等を配布する。		
参考文献	芦部信喜『憲法』（日本評論社） 秋元美世『ソーシャルワーカーのための法学』（有斐閣）		

【予備学習ガイド】

科 目 名	権利擁護特論
担 当 者	國見 真理子・長谷川 洋昭（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>権利擁護を行う私たちは単に知識を深めるだけではなく、質の高い実践力を保持することが求められよう。現代社会の子どもたちを取り巻く環境は、複雑かつ多様化している。そしてこれは日々変化を遂げているものであるが、「子どもの権利擁護」を図るにあたり「不変の価値」というものは存在しているのだろうか。履修者は、子ども達が生きる現代社会の現実だけではなく、今までの私たちの子どもがどのような「権利」を持つと認識され、またどのように護り上げられてきたのか、その変遷を可能な限り整理しておきたい。</p> <p>総論では、人間尊重を巡るリーガルマインドの理解を深めることを目指すので、権利擁護制度概要、憲法上の基本的人権、その他関連法規を把握すること。また子どもを巡る権利擁護に関する具体的事例を並行して収集する。</p> <p>各論では、各履修者が設定した領域の具体的事例に関連する関係機関・者の制度的位置づけを体系的に整理すること。またそこで発生する専門職の倫理綱領も合わせて学んでおきたい。</p>
文献リスト	<p><総論></p> <p>①池田真朗他『法の世界へ』有斐閣、2012</p> <p>②副田隆重他『ライフステージと法』有斐閣、2012</p> <p>③奥田昌道他『民法入門』有斐閣双書、2012</p> <p>④藤田宙靖「行政法入門」有斐閣、2013</p> <p><各論></p> <p>①相澤仁編、「子どもの権利擁護と里親家庭・施設づくり(やさしくわかる社会的養護シリーズ2)」、明石書店、2013</p> <p>②堀正嗣・栄留里美、「子どもソーシャルワークとアドボガシー実践」、明石書店、2009</p> <p>③福島大学権利擁護システム研究所、「『社会的弱者』の支援に向けて一地域における権利擁護実践講座一」、明石書店、2010</p> <p>④PASネット、「福祉専門職のための権利擁護支援ハンドブック(改訂版)」、ミネルヴァ書房、2012</p>
その他履修に必要な学習	<p>日頃から、子どもの権利を巡る報道資料（最近の例としては、ハーグ条約の問題など）や各種文献などに目を通し、社会における子どもの権利擁護の現状について自分なりの理解を深めておくことを期待する。</p>

科目名	施設運営管理特論（感染症対策を含む）	副題	
担当者	村井 祐一・金井 守（オムニバス・一部共同）		
開講期	後期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>施設運営管理特論では、障害者を含めた高齢者や子どもの社会福祉施設の運営や地域連携に関する知識を深め、質の高い施設運営を可能とする実践力を養うことを目的とする。</p> <p>講義においては、人間の尊厳の保持を基本とし、個々の施設を含む組織全体を持続、発展させる経営の視点に立ち、利用者に対するサービスの質の向上を考える。また、感染症対策等の安全衛生管理を始めとして、地域連携や個人情報保護及び情報の活用を含む情報管理、サービス管理、人材確保・育成、人事・労務・財務管理等に関する現状と問題点を分析し検討する。積極的に実践事例を活用する。</p> <p>金井担当の講義では、施設運営において根幹となるサービス管理、人材確保・育成、人事・労務・財務管理について教授する。</p> <p>村井担当の講義では、施設運営における現代的な課題である情報マネジメントの課題や地域との連携について教授する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 施設運営・管理全般に関する現状とその問題点等に関して理解を深める。 2. 各組織の特性や運営に関する理解を深め、福祉施設の運営管理に対する理解を深める。 3. 安全、サービス品質、財務、人事、労務、情報などの管理視点と手法について理解を深め、質の高い施設運営を可能とする実践力を身に付ける。 		
授業の方法・授業計画			
1	社会福祉施設の運営管理に関する課題（施設の沿革、概況、役割、課題）（村井・金井）		
2	社会福祉施設におけるサービス等諸管理（金井）		
3	社会福祉施設における人材育成（金井）		
4	社会福祉施設における人材育成に関する事例研究（金井）		
5	社会福祉施設における福祉人材の確保・育成・定着（村井）		
6	社会福祉施設における福祉サービスの基本理念と倫理（金井）		
7	社会福祉施設における事業計画・実施・評価・分析・報告（金井）		
8	社会福祉施設における感染症対策を含むリスクマネジメント（村井・金井）		
9	社会福祉施設における地域連携・地域貢献（村井）		
10	社会福祉施設における情報マネジメント（1）個人情報（村井）		
11	社会福祉施設における情報マネジメント（2）広報・公聴（村井）		
12	社会福祉施設運営の透明性と情報開示（村井・金井）		
13	社会福祉施設における記録の意義と活用（村井）		
14	社会福祉施設におけるプライバシー保護及び個人情報保護（村井）		
15	総括：施設運営管理と「マネジメント」（村井・金井）		
期末	試験実施なし		
授業に関する連絡	本授業は毎回、講義形式による授業を行うとともに、授業テーマに関連する受講生の小レポートに基づく受講生と講師によるまとめの議論も行う。		
評価方法及び評価基準	最終レポート（40%）と授業内における発表（30%）および小レポート（30%）によって評価を行う。		
事前・事後学習の内容	授業計画を参考に、事前に関連資料の調査・収集とその読み込みを行うこと。授業後は小レポートを整理して、学習内容のまとめを行うこと。		
履修上の注意	問題意識・当事者意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	武居敏編、『社会福祉施設経営管理論2015』、全国社会福祉協議会、2015年		
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社団法人日本社会福祉士会編『新社会福祉援助の共通基盤〔第2版〕下』、中央法規 2009年 ・ 在宅福祉サービス従事者の職場内研修のあり方に関する調査研究委員会『福祉の職場研修マニュアル―福祉人材育成のための実践手引』、全国社会福祉協議会 1995年 ・ 全国社会福祉協議会編『福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程テキスト 1～4』、全国社会福祉協議会 2013年 ・ 日本福祉介護情報学会編『福祉・介護の情報学―生活支援のための問題解決アプローチ』、オーム社 2009年 ・ 宇山勝儀著『社会福祉施設経営論』、光生館、2005年 		

【予備学習ガイド】

科目名	施設運営管理特論（感染症対策を含む）
担当者	村井 祐一・金井 守（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「施設運営管理特論」の授業を履修する上で福祉施設の運営や管理に関連する文献を読み「経営」や「管理」に対する基礎的理解を深めること。
文献リスト	<p>①社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座[11] 福祉サービスの組織と経営 第5版』2017年 中央法規</p> <p>②福祉臨床シリーズ編集委員会『社会福祉士シリーズ11 福祉サービスの組織と経営 第2版』2013年 弘文堂</p> <p>③小松理佐子『よくわかる社会福祉運営管理』2010年 ミネルヴァ書房</p> <p>④社会福祉学習双書編集委員会『社会福祉学習双書2013 社会福祉概論Ⅱ』2013年 全社協</p> <p>⑤神奈川県高齢者福祉施設協議会『高齢者福祉サービス 生活相談援助・業務マニュアル』2007年 中央法規</p> <p>⑥社団法人日本社会福祉士会編、『新社会福祉援助の共通基盤〔第2版〕下』、中央法規 2009年</p> <p>⑦在宅福祉サービス従事者の職場内研修のあり方に関する調査研究委員会、『「福祉の職場研修マニュアルー福祉人材育成のための実践手引」、全国社会福祉協議会、1995年</p> <p>⑧全国社会福祉協議会編、『福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程テキスト 1～4』、全国社会福祉協議会、2013年</p> <p>⑨日本福祉介護情報学会編、『福祉・介護の情報学ー生活支援のための問題解決アプローチ』、オーム社、2009年</p> <p>⑩宇山勝儀著、『社会福祉施設経営論』、光生館、2005年</p>
その他履修に必要な学習	日頃より、福祉・保育の福祉施設の経営に関連するニュース・資料に注目し、その情報収集を行うとともに、施設運営・管理に対する問題意識を高めておくこと。

科目名	障害児・者福祉特論（インクルーシブ論を含む）	副題	
担当者	鈴木 文治		
開講期	前期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	平成19年度の法改正により、わが国の障害児教育は、従来の「特殊教育」から「特別支援教育」へと大きく転換された。この背景には、障害の多様化、重度・重複化の進展に伴い、個別の教育的ニーズへの対応が求められたことと、国際的な潮流としての「インクルーシブ教育」の推進がある。個別の教育的ニーズへの対応とインクルーシブ教育の推進が、特別支援教育の重要課題となっているが、とりわけインクルーシブ教育の推進には大きな課題があり、様々な点から検討が必要になっている。現在の日本社会における障害児・者におけるインクルージョンの課題を分析し、その推進には何が必要かを、教育・福祉・保育の分野から検討する。また、広くソーシャルインクルージョンの課題にも視野を広げて研究する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. インクルージョンの理念とその背景にあるものを理解する。 2. 日本社会におけるインクルージョンの課題を明らかにする。 3. 教育におけるインクルーシブ教育の現状と課題を理解する。 4. 福祉におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。 5. 保育におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	日本社会における排除と受容①障害者問題		
2	日本社会における排除と受容②ホームレス問題		
3	日本社会における排除と受容③在日外国人問題		
4	インクルージョンの理念		
5	インクルージョンの背景にあるもの①障害観の転換		
6	インクルージョンの背景にあるもの②障害学の提唱		
7	特別支援教育とは何か		
8	インクルーシブ教育から見る「不登校」		
9	インクルーシブ教育から見る「いじめ」		
10	インクルーシブ教育から見る「引きこもり・ニート」		
11	保育におけるインクルージョン		
12	発達障害とインクルージョン		
13	ホームレス障害者		
14	累犯障害者		
15	人権とインクルーシブ教育		
期末			
授業に関する連絡	次回のテーマ・内容については授業内で連絡する。		
評価方法及び評価基準	期末レポート（50%）及び発題発表（50%）に基づいて総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前に次回のテーマについて情報収集すること。事後には授業のまとめを行うこと。		
履修上の注意	社会的排除の問題について、広くニュースや文献を探って関心を持つことが望まれる。		
テキスト	「ホームレス障害者」鈴木文治著 日本評論社 「排除する学校」鈴木文治著 明石書店		
参考文献	「社会的排除」岩田正美著 有斐閣 「インクルージョンをめざす教育」鈴木文治著 明石書店		

【予備学習ガイド】

科 目 名	障害児・者福祉特論（インクルージョン論を含む）
担 当 者	鈴木 文治
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	世界的な潮流となっているインクルージョンの考え方に基づいた共生社会のあり方が求められている。教育・福祉それぞれの分野で、インクルージョンの課題を明らかにすることが授業の目的である。そのために社会における排除と包摂（インクルージョン）の状況について予備的に学ぶ必要がある。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ① 「社会的排除」 岩田正美著 有斐閣 ② 「インクルージョン教育への道」 P. ミットラー著 東京大学出版会 ③ 「インクルージョンをめざす教育」 鈴木文治著 明石書店
その他履修に必要な学習	インクルージョンや排除の問題に関心を持って社会事象を見据えること（新聞やニュースなど）

科目名	地域福祉特論	副題	
担当者	和 秀俊		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	現代社会では、外国人家族の増加、核家族化や社会的孤立などに象徴される地域に共通する課題を解決するために、地域住民が支えあう地域福祉実践が求められている。この講義では、地域福祉実践の基礎となるコミュニティについて、近年のコミュニティ論を扱った学術書を読み込み、コミュニティの本質を探究し、今後の地域福祉実践に生かすことを目的とする。		
授業のねらい・到達目標	1. 学術書の読み方を修得する。 2. コミュニティ論を探究し、地域福祉実践を学術的にアプローチできるようになる。 3. 学術的な概念、理論を適切に理解し、活用できるようになる。		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション		
2	コミュニティとは①～理念・概念		
3	コミュニティとは②～理論		
4	コミュニティとは③～歴史		
5	コミュニティの現状①～都市部		
6	コミュニティの現状②～農村部		
7	コミュニティの現状③～離島		
8	コミュニティの課題①～都市部		
9	コミュニティの課題②～農村部		
10	コミュニティの課題③～離島		
11	コミュニティの展望①～都市部		
12	コミュニティの展望②～農村部		
13	コミュニティの展望③～離島		
14	コミュニティケアの展望		
15	コミュニティケアシステムの展望		
期末	なし		
授業に関する連絡	本授業では、学術書を履修生全員で読み込み、各回担当の履修生がレジュメ作成を担当し、発表することを課する。その際、概念、理論などを理解した上で、レジュメ作成および発表をすること。		
評価方法及び評価基準	発表でのレジュメ作成（50%）、発表（50%）		
事前・事後学習の内容	予定されている内容に該当する教科書の章を事前に読んでおくこと 授業の内容を必ず復習すること		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	オリエンテーションの際に提示する		
参考文献	適宜紹介する		

【予備学習ガイド】

科目名	地域福祉特論
担当者	和 秀俊
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	事前に学ぶべき内容は、以下紹介する書籍を読み、コミュニティ論の概要を整理しておく。
文献リスト	①船津衛・浅川達人編著『現代コミュニティとは何か―「現代コミュニティの社会学」入門』、恒星社厚生閣、2014
その他履修に必要な学習	履修生自身の研究テーマにおいて、コミュニティがどのように関係するかについて整理しておく。それによって、本授業で学んだことが、履修生自身の研究に大いに活かされると思われる。

科目名	生活環境学特論	副題	
担当者	山崎 さゆり		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもは住まいを中心とした地域環境の中で、様々なヒト・モノ・コトと関わりながら多くの学習をし、やがて自立した人間へと成長していく。子どもの健やかな成長・発達と人格形成を促進、あるいは阻害する生活環境について考える。</p> <p>対象領域は住宅・施設環境、地域環境であり、これら相互の密接な関連性を念頭に置きつつ人的・物的の両側面における環境整備課題を明らかにし、その過程から深い学識を醸成する。また、子どもの発達を支える生活環境についてグローバルな視点を含めて論理的分析を行い、それらの実現のために必要な質の高い実践力を養う。</p> <p>授業では、子どもの人格形成や人間発達に深く関わる生活環境として、“住まいと家族”を取り上げ、テキスト、および関連する文献・論文のレビューを行いながら、討論を進めていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの人間発達の観点から様々な生活環境の問題を捉え分析する中で深い学識を醸成する。 2. 生活行為と住空間の関係を多角的に捉え、人間相互の关系到及ぼす空間構造について理解する。 3. 子どもの生活空間形成の在り方、生活環境の改善方法について理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	各自の興味・関心に沿ったテーマの検討		
3	テーマに関連した文献の紹介		
4	テキストの輪読①		
5	テキストの輪読②		
6	テキストの輪読③		
7	テキストの輪読④		
8	テキストの輪読⑤		
9	課題の設定		
10	関連論文のレビューと討論①		
11	関連論文のレビューと討論②		
12	関連論文のレビューと討論③		
13	課題に関する研究動向と評価の検討		
14	課題のレポート作成		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	個別のメール及びびでんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	報告（30%）、討論（30%）、レポート（40%）を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	事前・事後共に、関連する文献・資料を日頃から収集してよく読み込んでおくと同時に、毎回の授業における報告内容をまとめておくこと。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し積極的に探究心をもって取組み、問題意識が深まることを期待する。		
テキスト	小林秀樹著「居場所としての住まい—ナワバリ学が解き明かす家族と住まいの深層」新曜社 ISBN978-4-7885-13488		
参考文献	高橋鷹志著「子どもを育てるたてもの学」チャイルド本社 北浦かほる著「世界の子ども部屋—子どもの自立と空間の役割」井上書院 住宅総合研究財団編「現代住宅研究の変遷と展望」丸善 水村容子他編「私たちの住まいと生活」彰国社 長澤泰監修「高齢者のすまい」市ヶ谷出版社		

【予備学習ガイド】

科目名	生活環境学特論
担当者	山崎 さゆり
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>文献①～③は、そもそも子ども・人間にとって最適な生活環境とはどのようなものなのか、について考える上で一助となる古典的文献であり、一読されたい。また、④～⑤については、自らの問題意識を喚起する、あるいは、採取したデータを丹念に整理していくプロセスにおいてヒントを与えてくれると思われる。</p> <p>その他、現代の子どもを取り巻く生活環境（ヒト・モノ・コト）の現状と課題について、様々な視点から考察できるよう、文献リストを参考にしながら、基礎的、かつ幅広い知識を身につけるよう心掛けてほしい。</p>
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①ヨハン・ホイジンハ著「ホモ・ルーデンス」中央公論新社 ②ロジェ・カイヨワ著「遊びと人間」講談社 ③S・シャマイエフ他著「コミュニティとプライバシー」鹿島出版会 ④石毛直道著「住居空間の人類学」鹿島出版会 ⑤今和次郎著「考現学入門」筑摩書房 ⑥池邊陽著「デザインの鍵」丸善 ⑦延藤安弘著「「まち育て」を育む—対話と協働のデザイン」東京大学出版会 ⑧上田篤著「日本人と住まい」岩波新書 ⑨鈴木成文著「住まいを読む—現代日本住居論」建築資料研究社 ⑩鈴木成文著「五一C白書」住まいの図書館出版局 ⑪田中直人他著「五感を刺激する環境デザイン」彰国社 ⑫ヴァレンタイン、ギル著「子どもの遊び・自立と公共空間—「安全・安心」のまちづくりを見直す イギリスからのレポート」明石書店
その他履修に必要な学習	<p>調査研究を行う上で、定量的・定性的なデータ解析方法のいずれも選択できるように、調査分析手法の基本的な事項について学習すると良い。</p>

科目名	精神医学特論	副題	
担当者	中川 正俊		
開講期	前期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	今日の代表的な精神障害 (mental disorders) を取り上げて、その成り立ちのメカニズムや精神医学的診断・治療などについて、生物学的・心理的・社会的な視点に立脚した重層的な知識を涵養する。同時に患者が体験する「病い (illness)」に加え、精神障害 (mental disorders) が患者の生活・人生に及ぼす影響についても全人的な理解を深める。精神障害の客観的側面と主観的側面の双方を理解することを通して、精神障害 (mental disorders) のある人に対する高度な専門性に基づく質の高い支援を実践する力量を養う。加えて精神医学上のトピックスについても講義を行う。授業は講義形式を基本とするが、学問的及び実践的な見地に立脚した活発な討議も重視する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 代表的な精神障害 (mental disorders) に関する専門的知識を取得する。 2. 患者が体験する「病い (illness)」と生活・人生への影響について理解を深める。 3. 専門的知識を支援の実践に応用する視点を獲得する。 4. 精神医学および精神障害 (mental disorders) に関する様々な論点につき、自ら問いを発し論ずることができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	精神医学の基礎知識		
2	精神科診断学		
3	精神症状学		
4	認知症性疾患		
5	統合失調症 (概念, 診断, 疫学, 成因仮説, 症状)		
6	統合失調症 (認知機能障害, 特徴的行動特性, 経過, 予後, 治療法)		
7	気分障害 (概念, 診断, 成因仮説, 症状)		
8	気分障害 (経過, 予後, 治療法, 特別なうつ病)		
9	神経症性障害・ストレス関連障害・身体表現性障害		
10	パーソナリティ障害, 摂食障害		
11	小児期の精神障害		
12	身体的治療法		
13	精神療法		
14	環境・社会療法		
15	精神医療の現状		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義形式で進行するが、授業毎に質問や議論の時間も確保する。		
評価方法及び評価基準	レポート (70%) , 質問・発話・討議への参加度 (30%)		
事前・事後学習の内容	<p>[事前学習] 授業テーマにつき、文献などを使用して下調べをするとともに、生活や実践場面を通して生じた疑問点をまとめて授業に臨むこと。</p> <p>[事後学習] 授業で配布したプリントに基づき知識を整理すること。</p>		
履修上の注意	履修者は積極的に議論に参加すること。		
テキスト	特になし。授業毎にプリントを配布する。		
参考文献	ICD-10精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン新訂版 (医学書院) 現代臨床精神医学第12版 (金剛出版)		

【予備学習ガイド】

科 目 名	精神医学特論
担 当 者	中川 正俊
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	文献リストにある精神医学，精神障害に関する一般書や平易な専門書などを参考に，認知症，統合失調症，気分障害（うつ病，躁うつ病），神経症，パーソナリティ障害，摂食障害，発達障害などの主要な精神障害に関する基礎的な知識を事前学習しておくこと。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①精神病（岩波新書） ②心の病 回復への道（岩波新書） ③精神医学ハンドブック [第7版] 医学・保健・福祉の基礎知識（日本評論社） ④好きになる精神医学 第2版（講談社） ⑤こころの病気を知る事典 新版（弘文堂） ⑥子どもの精神医学ハンドブック [第2版]（日本評論社） ⑦改訂新版精神保健福祉士養成セミナー 1 精神医学－精神疾患とその治療
その他履修に必要な学習	科学としての精神医学は日進月歩である。また精神医療に関しても，そのシステムや基盤となる法制度，医療思想は変革を遂げつつある。授業では最新の知見や情報の提供を行うが，自らも精神医学のトピックスや精神医療システムの変化に関する最新の知識を得るよう努力すること。

科目名	臨床心理学特論	副題	認知行動療法
担当者	久保 義郎		
開講期	後期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>人間学の観点から、ケアリングの発想に基づく対人支援は重要であり、それを実現する具体的な技術・学問体系として、臨床心理学がある。</p> <p>本講義では、主に認知行動療法の発想や技法を学び、現場での対人支援にそれらを生かし、効果的な実践の実現を狙う。受講者は予め提示された課題について学習した上で各自発表し、それに基づいて全員で討論する形式を主とする。現場における各人の問題意識を授業に反映させたい。</p> <p>また、同一の事例であっても、障害福祉・リハビリテーションの観点と、発達支援・特別支援教育の観点とでは異なるアプローチが考え得ることを示したい。</p>		
授業のねらい・到達目標	対人支援の現場で生じる問題について、認知行動論的な見立てとそれに基づくアプローチ方法を立案できるようになることを目標とする。		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション（授業の進め方）		
2	認知行動療法概説（レスポナント系）		
3	認知行動療法概説（オペラント系）		
4	認知行動療法概説（認知系）		
5	文献発表・討論、および補足講義（Activities of Daily Living）		
6	文献発表・討論、および補足講義（言語・コミュニケーション）		
7	文献発表・討論、および補足講義（社会性・Social Skills Training）		
8	文献発表・討論、および補足講義（親・家族）		
9	文献発表・討論、および補足講義（学校）		
10	文献発表・討論、および補足講義（療育）		
11	文献発表・討論、および補足講義（リハビリテーション：機能改善）		
12	文献発表・討論、および補足講義（リハビリテーション：代償訓練）		
13	文献発表・討論、および補足講義（環境調整）		
14	文献発表・討論、および補足講義（連携・協働）		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	初回を除いて受講者が資料作成と発表を行う。そのため、担当回数分、資料作成の時間が必要となるので、スケジュールの調整に注意すること。		
評価方法及び評価基準	発表内容70%、討論30%の割合で評価する。		
事前・事後学習の内容	事前学習としては、次回発表者の資料を読み、事後学習としては、発表と討論、および教員のコメントをノートしたものを読み直す。		
履修上の注意	講義科目ではあるが、発表や討論など、演習としての要素が多分にあるので、欠席をしないこと。		
テキスト	行動療法研究、特殊教育学研究、福祉心理学研究、カウンセリング研究の中からテーマに該当する論文を用いる。		
参考文献	福井 至 著『図解による学習理論と認知行動療法』培風館 2008 坂野雄二 著『認知行動療法』日本評論社 1995 熊野宏昭 著『新世代の認知行動療法』日本評論社 2012		

【予備学習ガイド】

科 目 名	臨床心理学特論
担 当 者	久保 義郎
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	事前学習として、認知行動療法の基礎を理解しておくことが望まれる。具体的には、認知行動療法が根拠とする学習理論、およびそれらに対応する認知行動療法の技法について、下記の文献1.を用いて学習する。文献2.については、文献1.を読了した後に学習することを推奨する。
文献リスト	<p>①福井 至 著『図解による学習理論と認知行動療法』培風館 2008</p> <p>②坂野雄二 著『認知行動療法』日本評論社 1995</p>
その他履修に必要な学習	<p>臨床心理学領域での研究を行う場合は、下記の文献も学習することを推奨する。</p> <p>南風原 朝和 ほか編集『心理学研究法入門』東京大学出版会 2001</p> <p>下山 晴彦 著『臨床心理学研究の技法』福村出版 2000</p> <p>D. H. バーロー 著『一事例の実験デザイン ケーススタディの基本と応用』二瓶社 1997</p> <p>岩本 隆茂 ほか著『シングル・ケース研究法 新しい実験計画法とその応用 (Keiso psychology) 』勁草書房 1990</p>

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	生田 久美子		
開講期	通年	単位数	4単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>生田担当の研究指導 I では、修士論文作成に必須とされる「子ども人間学」の基礎文献を講読することを中核におく。前期はプラトンの『テアイテトス』『メノン』の講読を通して、人間の「知」の根源について考察する。後期は、子どもの「知」の根源を探求することを目的としてルソーの『エミール』及びデューイの『民主主義と教育』を講読し、人間としての「子ども」の存在を明らかにすることを試みる。さらに、上記のテーマに関連する文献検索を進めながら最終的に受講者の修士論文テーマにつなげていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向けて「子ども人間学」の基礎資料を講読し、理解する。</p> <p>2. 修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献を収集する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文の作成に向けて①	16	イントロダクション—修士論文の作成に向けて②
2	文献検索の方法	17	基礎文献の輪読—『エミール』を読む①
3	基礎文献の輪読—『テアイテトス』を読む①	18	基礎文献の輪読—『エミール』を読む②
4	基礎文献の輪読—『テアイテトス』を読む②	19	基礎文献の輪読—『エミール』を読む③
5	基礎文献の輪読—『テアイテトス』を読む③	20	基礎文献の輪読—『エミール』を読む④
6	基礎文献の輪読—『テアイテトス』を読む④	21	基礎文献の輪読—『エミール』を読む⑤
7	基礎文献の輪読—『テアイテトス』を読む⑤	22	基礎文献の輪読—『民主主義と教育』を読む①
8	基礎文献の輪読—『メノン』を読む①	23	基礎文献の輪読—『民主主義と教育』を読む②
9	基礎文献の輪読—『メノン』を読む②	24	基礎文献の輪読—『民主主義と教育』を読む③
10	基礎文献の輪読—『メノン』を読む③	25	基礎文献の輪読—『民主主義と教育』を読む④
11	基礎文献の輪読—『メノン』を読む④	26	基礎文献の輪読—『民主主義と教育』を読む⑤
12	基礎文献の輪読—『メノン』を読む⑤	27	研究発表①
13	研究発表①	28	研究発表②
14	研究発表②	29	研究発表③
15	まとめ	30	まとめ
期末		期末	
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談の上授業時間を決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	自分自身の「教育」についての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結び付け、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	<p>前期：プラトン 田中訳『テアイテトス』、岩波書店、1947年 プラトン 藤沢訳『メノン』、岩波文庫、1994年 後期：J. ルソー著、今野訳『エミール』、岩波書店、1962年 J. デューイ著、松野訳『民主主義と教育』、岩波書店、1979年</p>		
参考文献	<p>原他、『近代教育思想を読みなおす』、新曜社、1999年 J. デューイ著、市村訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』、講談社、1998年 J. ルソー著、桑原ほか訳『社会契約論』、岩波書店、1954年 プラトン著、藤沢訳『プロタゴラス—ソフィストたち』、岩波書店、1988年 プラトン著、藤沢訳『国家』、岩波文庫、1979年</p>		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導 I
担当者	生田 久美子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導 I」の授業を履修するために、「教育学」の基礎文献を読み、理解しておくこと。 また、論文作成のための基本的な技術について学んでおくこと。
文献リスト	<p>①生田久美子 『わざから知る』、東京大学出版会、2007年</p> <p>②河野哲也 『レポート・論文の書き方入門』、慶應義塾大学出版会、2002年</p> <p>③新堀聡 『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』、同文館出版、2002年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「教育」をめぐる課題に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	安村 清美		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次
			1年次
授業の概要	<p>研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>安村担当の研究指導 I では、年間を通し、子どもの身体と行為に現れる表現に関して探究していく。このために、前期には、指定した文献講読を中心に、人間文化としての舞踊という観点を通して身体へのまなざしの変容について考察する。後期には、子どもへの視点として、子どもに現れる身体行為を読み解くことを試みる。このために、子どもの表現の実践に関する論文などの研究内容について検討する。さらに、各自の研究課題を明確にし修士論文テーマにつなげていくために、表現体である人間としての「子ども」の表現特性について明らかにすることを試みる。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向け、文献講読を通して「子ども人間学」に基づく基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。</p> <p>2. 修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し方向性について検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文の作成に向けて①	16	イントロダクション—修士論文の作成に向けて②
2	文献および先行研究の検索	17	課題レポート発表とディスカッション①
3	文献および先行研究リストの作成と発表	18	課題レポート発表とディスカッション②
4	文献講読—「考える身体」を読む①	19	先行研究の検索と収集①
5	文献講読—「考える身体」を読む②	20	先行研究の検索と収集②
6	文献講読—「考える身体」を読む③	21	先行研究についての発表とディスカッション①
7	文献講読—「考える身体」を読む④	22	先行研究についての発表とディスカッション②
8	文献講読—「考える身体」を読む⑤	23	先行研究についての発表とディスカッション③
9	文献講読—「考える身体」を読む⑥	24	先行研究についての発表とディスカッション④
10	文献講読—「考える身体」を読む⑦	25	修士論文のテーマと構成・内容についての検討①
11	文献講読—「子どもたちの創造力を育む」を読む①	26	修士論文のテーマと構成・内容についての検討②
12	文献講読—「子どもたちの創造力を育む」を読む②	27	研究発表①
13	文献講読—「子どもたちの創造力を育む」を読む③	28	研究発表②
14	文献講読—「子どもたちの創造力を育む」を読む④	29	研究発表③
15	文献講読—「子どもたちの創造力を育む」を読む⑤	30	まとめ
期末		期末	
授業に関する連絡	授業時間は受講者と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出す小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	課題についての準備をして授業に臨むこと。また、授業内容の復習をもとに次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	文献研究と共に子どもの表現に関する実態から学ぶ姿勢を必要とする。		
テキスト	<p>前期：「考える身体」三浦雅士、1999、NTT出版</p> <p>後期：「子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践」佐藤、今井編、2003東京大学出版会</p>		
参考文献	必要に応じて紹介する。		

【予備学習ガイド】

科 目 名	研究指導 I
担 当 者	安村 清美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導 I」の授業を履修するために、下記にあげる文献以外にも、「身体論」「表現論」に関する基礎文献を読み、理解しておくこと。 また、論文作成のための基本的な技術について学んでおくこと。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①『舞踊学原論』M・N・ドウブラー、松本訳1974 ②『表現の世界』松本千代栄、大修館、1985 ③『精神としての身体』市川浩、勁草書房、1982 ④『コミュニケーションとしての身体』菅原、野村編、大修館書店、2006 ⑤『ダンスの教育学—ダンス教育の原論』監修：松田、松本、徳間書店、1992 ⑥『ダンスの教育学—表現運動の学習』監修：松田、松本、徳間書店、1992
その他履修に必要な学習	本研究指導においては、表現体である人間としての「子ども」の表現特性について明らかにすることを試みるため、保育現場やメディアなどを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	佐伯 胖		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次
			1年次
授業の概要	<p>研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>佐伯担当の研究指導 I では、「子ども人間学」における幼児教育研究の理論的・実践的研究の基礎を固める。前期には基本的なテキスト：佐伯 胖著『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』東京大学出版会、2014年を講読し、理論的基礎を学ぶ。後期には、「論文の書き方」について「論文の作法」（非売品）をもとに、「論文を書くとはどういうことか」についての基本的作法を身につけ、そのあと、野矢茂樹著『新版 論理トレーニング』（哲学教科書シリーズ）産業図書、2006年をもとに、論理的な文章の書き方を学ぶ。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>修士論文の作成に向けて文献検索をして「子ども人間学」をもとにした保育論へむけての基礎資料を講読し、理解する。さらに、修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献を収集し論文の構想を検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション：論文とは何か	16	『論文の作法』を読む①
2	文献を「読む」ということ	17	『論文の作法』を読む②
3	『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』を読む。①	18	『論文の作法』を読む③
4	『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』を読む。②	19	『論文の作法』を読む④
5	『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』を読む。③	20	『論理トレーニング101題』を読む①
6	『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』を読む。④	21	『論理トレーニング101題』を読む②
7	乳幼児発達研究の現在①	22	『論理トレーニング101題』を読む③
8	乳幼児発達研究の現在②	23	『論理トレーニング101題』を読む④
9	乳幼児発達研究の現在③	24	すぐれた論文を読む①
10	乳幼児発達研究の現在④	25	すぐれた論文を読む②
11	『子どもを「人間としてみる」ということ』を読む①	26	すぐれた論文を読む③
12	『子どもを「人間としてみる」ということ』を読む②	27	各自の論文構想の検討①
13	『子どもを「人間としてみる」ということ』を読む③	28	各自の論文構想の検討②
14	『子どもを「人間としてみる」ということ』を読む④	29	各自の論文構想の検討③
15	『子どもを「人間としてみる」ということ』を読む⑤	30	各自の論文構想の検討④
期末		期末	
授業に関する連絡	授業時間は受講者と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	「論文を書く」目的、「読み手」意識、伝えたい「熱意（パッション）」を意識化する。		
テキスト	佐伯 胖著『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』東京大学出版会、2014年 子どもと保育総合研究所編佐伯胖ほか著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2014年 野矢茂樹著『新版 論理トレーニング』（哲学教科書シリーズ）産業図書、2006年		
参考文献	佐伯 胖著 『認知科学の方法』（コレクション認知科学1）東京大学出版会、2007年		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導 I
担当者	佐伯 胖
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導 I」の授業を履修するために、教育学・認知科学・発達心理学の基礎文献を読み、理解しておくこと。 また、論文作成のための基本的な技術について学んでおくこと。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①佐伯胖著『「学び」の構造』 東洋館 1975年 ②佐伯胖著『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店 1995年 ③佐伯胖著『「学び」を問いつづけて』小学館、2003年 ④佐伯胖著『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』東京大学出版会、2014年 ⑤佐伯胖ほか著『こどもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年 ⑥ジーン・レイブ, エティエンヌ・ウエンガー著 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』 産業図書、1993年 ⑦佐伯胖著 『認知科学の方法』（コレクション認知科学1）東京大学出版会、2007年 ⑧佐伯胖編著『共感一育ち合う保育のなかで一』ミネルヴァ書房、2007年
その他履修に必要な学習	学会誌『保育学研究』、『発達心理学研究』、『質的心理学研究』などから、興味深い論文を選び、精読する習慣を身につけること。

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	石橋 哲成		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次
			1年次
授業の概要	<p>研究指導 I では、子どもの遊びに関する理論を「子ども人間学」の視点から検討していく。前期は、世界で最初に「幼稚園 (Kindergarten)」を創立したフレーベルの主著『人の教育 (Die Menschenerziehung)』を講読し、フレーベルの世界観、子ども観、幼児教育観、とりわけ遊び観がどのようなものであったのか、深く読みこんでいく。後期には、フレーベルの幼児教育思想が、日本の幼児教育界にどのように受容されてきたのかを見ていき、今日の日本の幼児教育の課題についても考えていく。後期の後半からは、修士論文作成のための基本的な指導も始める。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>フレーベルは、現在の日本の幼児教育界においても、幼児教育の大きな一つの潮流となっている。フレーベルの『人間の教育』を講読することによって、それらの根底にある世界観、子ども観、遊び観を正しく理解すると同時に、フレーベルの教育思想が日本へどのように受容されたのか説明できるようにすることを授業の目標とする。</p>		
1	イントロダクション — フレーベルの幼児教育史における位置	16	日本におけるフレーベル教育思想の受容①
2	フレーベル幼児教育思想が生まれた背景①	17	日本におけるフレーベル教育思想の受容②
3	フレーベル幼児教育思想が生まれた背景②	18	日本におけるフレーベル教育思想の受容③
4	フレーベルの著『人間の教育』を読む①	19	日本におけるフレーベル教育思想の受容④
5	フレーベルの著『人間の教育』を読む②	20	日本におけるフレーベル教育思想の受容⑤
6	フレーベルの著『人間の教育』を読む③	21	日本におけるフレーベル教育思想の受容⑥
7	フレーベルの著『人間の教育』を読む④	22	日本におけるフレーベル教育思想の受容⑦
8	フレーベルの著『人間の教育』を読む⑤	23	ゼミ生による修士論文の構想の発表
9	フレーベルの著『人間の教育』を読む⑥	24	ゼミ生の修士論文作成のための基本指導①
10	フレーベルの著『人間の教育』を読む⑦	25	ゼミ生の修士論文作成のための基本指導②
11	フレーベルの著『人間の教育』を読む⑧	26	ゼミ生の修士論文作成のための基本指導③
12	フレーベルの著『人間の教育』を読む⑨	27	ゼミ生の修士論文作成のための基本指導④
13	研究発表①	28	修士論文の中間研究発表①
14	研究発表②	29	修士論文の中間研究発表②
15	まとめ	30	まとめ
期末		期末	
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談の上授業時間を決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回のレポート (50%) 及び研究発表 (50%) を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	ドイツ語が出来ることを履修条件とはしないが、ドイツ語の辞書が引ける段階にあることが望ましい。		
テキスト	<p>フレーベル著/荒井武訳『人間の教育』/岩波文庫 (必要な原文は担当者で用意する)</p> <p>石橋哲成著『フレーベル教育思想の日本への受容』/玉川学園DTP/2012</p> <p>永井優美著『近代日本保育者養成史の研究』/風間書房/2016</p>		
参考文献	小笠原道雄著『フレーベルとその時代』/玉川大学出版部/1994		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導 I
担当者	石橋 哲成
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導 I」の授業においては、「幼児教育思想」の基本中の基本であるフレーベルの主著『人間の教育』を講読する予定である。よって、そのための基礎文献をしっかりと読んでおくことが求められる。併せて、各自の修士論文執筆のための基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①小笠原道雄著『フレーベルとその時代』／玉川大学出版部／1994</p> <p>②フレーベル著、岡本英明訳『フレーベルの教育学』／理想社／1982</p> <p>③河野哲也著『レポート・論文の書き方入門』／慶應義塾大学出版会／2002</p> <p>④新堀聡著『評価される博士・修士・卒業論文の書き方・考え方』／同文館出版／2002</p>
その他履修に必要な学習	大学院での講読であるので、全部を原典で読むことは出来なくても、フレーベルの『人間の教育』に出てくる重要な文章については、ドイツ語でも確認したい。ドイツ語の初歩を学び、せめてドイツ語の辞書が引けることを期待している。

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	通年	単位数	4単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導Iでは、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。犬塚担当の研究指導Iでは、修士論文のテーマとその周辺となる研究分野の検討、研究方法の習得、データや資料の収集と整理、基礎的文献の講読を中核におく。前期は、国内外の政策の理論や実践について学ぶ。後期は、日本保育学会編『保育学講座』（全5巻）から、各自の研究関心にそって章を選び講読を行う。以上の授業内容を踏まえて、各自の研究課題を洗練させ、最終的に受講者の修士論文テーマにつなげていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向けて「子ども人間学」の基礎文献を講読し、理解する。 2. 修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献や情報を収集する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文の作成に向けて①	16	イントロダクション—修士論文の作成に向けて②
2	研究関心についての討論	17	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む①
3	文献および先行研究の探索	18	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む②
4	研究関心の社会的背景・基礎理論	19	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む③
5	基礎文献の講読—政府白書を読む①	20	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む④
6	基礎文献の講読—政府白書を読む②	21	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む⑤
7	基礎文献の講読—政府白書を読む③	22	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む⑥
8	基礎文献の講読—政府白書を読む④	23	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む⑦
9	基礎文献の講読—政府白書を読む⑤	24	基礎文献の講読—『保育学講座』を読む⑧
10	基礎文献の講読—政府白書を読む⑥	25	各自の研究関心に基づく先行研究の分析①
11	基礎文献の講読—政府白書を読む⑦	26	各自の研究関心に基づく先行研究の分析②
12	基礎文献の講読—政府白書を読む⑧	27	研究発表①
13	各自の論文構想の検討①	28	研究発表②
14	各自の論文構想の検討②	29	研究発表③
15	まとめ	30	まとめ
期末		期末	
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談の上授業時間を決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回のレポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	「子ども人間学」（Child Studies as Human Science）についての問題意識と、授業で講読した文献の内容とを結び付け、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	『少子化社会対策白書』（平成29年版）内閣府		
参考文献	日本保育学会編『保育学講座』（全5巻）東京大学出版会、2016年		

【予備学習ガイド】

科 目 名	研究指導 I
担 当 者	犬塚 典子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導I」の授業を履修するために、「子ども人間学」の基礎文献を読み、理解しておくこと。また、論文作成のための基本的な技術について学んでおくこと。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①沼野一男・松本憲他編『教育の原理（第4版）』学文社，2010年. ②田中克佳編『「教育」を問う教育学』慶應義塾大学出版会，2006年. ③真壁宏幹編『西洋教育思想史』慶應義塾大学出版会，2016年. ④久保義三・米田俊彦他編『現代教育史事典』東京書籍，2001年. ⑤ジョイ・A・パーマー他編『教育思想の50人』青土社，2012年. ⑥荘司雅子『幼児教育の源流』明治図書出版，1977年. ⑦小玉重夫『シティズンシップの教育思想』白澤社，2003年
その他履修に必要な学習	「子ども人間学」をめぐる課題に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集するとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	内藤 知美		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次
			1年次
授業の概要	<p>研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>内藤担当の研究指導 I では、保育の構造と保育者の専門性について探究を深める。特に、主体的な学び手である子どもが、人、場所、モノとの間で生起させる関係性に着目し、子どもの学びの可能性を広げるカリキュラムや保育者の専門的学びについて検討する。また海外の保育の動向（学びの共同性、社会文化的評価等）に触れながら新しい時代の保育を展望する。前期は、文献講読を中心に、海外の動向を視野に入れ保育の構造や子どもの学びを支える方策について探究する。後期は、論文の基本的な書き方を学ぶと共に、保育のカリキュラム、実践と評価、保育者の成長プロセス等に関わる研究論文を検討し、各自の研究課題を明確に修士論文のテーマにつなげる。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>「子ども人間学」的観点から、子どもの学びとそれを支えるの保育の場の構造を探究するために、基礎資料を講読し、理解する。さらに、修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献を収集し、論文の構想を検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けてー	16	保育学研究の手法とその意義
2	保育学・保育実践学研究の動向①	17	研究情報の収集と構造化の方法
3	保育学・保育実践学研究の動向②	18	研究の倫理
4	保育学・保育実践学研究の動向③	19	実践の場との関係構築の在り方
5	保育学・保育実践学研究の動向④	20	研究テーマの設定と方法
6	保育学・保育実践学研究の動向⑤	21	研究データの分析方法
7	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。①	22	保育・保育実践研究を読む①
8	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。②	23	保育・保育実践研究を読む②
9	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。③	24	保育・保育実践研究を読む③
10	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。④	25	保育・保育実践研究を読む④
11	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。⑤	26	保育・保育実践研究を読む⑤
12	各自の研究関心・テーマの検討①	27	各自の論文構想の検討①
13	各自の研究関心・テーマの検討②	28	各自の論文構想の検討②
14	各自の研究関心・テーマの検討③	29	各自の論文構想の検討③
15	各自の研究関心・テーマの検討④	30	まとめ
期末		期末	
授業に関する連絡	授業時間は受講者と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	泉千勢編著『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのかー子どもの豊かな育ちを保障するためにー』ミネルヴァ書房, 2017年		
参考文献	佐伯胖『幼児教育へのいざないー円熟した保育者になるためにー』東京大学出版会, 2014年 M. カー, 大宮勇雄、鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントとするー「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房, 2013年		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導 I
担当者	内藤 知美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導 I」の授業を履修するために、子どもの学びや育ち、さらには保育学にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年</p> <p>②大場幸夫『こどもの傍らに在ることの意味』萌文書林, 2007年</p> <p>③鯨岡峻『子どもの心の育ちをエピソードで描く』ミネルヴァ書房, 2013年</p> <p>④佐伯胖ほか著『子どもを「人間」としてみる』ということ』ミネルヴァ書房, 2013年</p> <p>⑤津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房, 1997年</p> <p>⑥D. ショーン著, 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—』ゆみる出版, 2001年</p> <p>⑦レイチェル・パーク, ジュデイス・ダンカン著, 七木田敦, 中坪史典 (監訳) 『文化を映し出す子どもの身体：文化人類学からみた日本とニュージーランドの幼児教育』福村出版, 2017年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	生田 久美子		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>生田担当の研究指導Ⅱでは、前期は、V.A. ハワード、G. ライル、I. シェフラー等の教育学における「知識論」の系譜を文献を読み進めながら各受講者の修士論文指導を中心にして授業を進める。その上で後期は、人間としての子どものための「知」とは何かについて、「わざ」論、状況論、ケアリング論などの最新の研究動向を踏まえながら、論文の最終テーマに沿って指導を行う。受講者は教員の指導を受けながら執筆作業を始める。集中的に論文作成の指導及び論文審査会での発表に向けて指導を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>前期は、修士論文の最終テーマに沿って「知識論」に関する文献の講読を行い、「子ども人間学」における「知識論」について理解する。</p> <p>後期は、教員の指導を受けながら、執筆作業に集中し、論文の完成に向かう。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて	16	イントロダクションー論文の完成に向けて
2	V.A. ハワード “Artistry” を読む①	17	論文の完成に向けての個別指導①
3	V.A. ハワード “Artistry” を読む②	18	論文の完成に向けての個別指導②
4	G. ライル “The Concept of Mind” ①	19	論文の完成に向けての個別指導③
5	G. ライル “The Concept of Mind” ②	20	論文の完成に向けての個別指導④
6	子ども人間学における「知識論」①	21	論文の完成に向けての個別指導⑤
7	子ども人間学における「知識論」②	22	論文の完成に向けての個別指導⑥
8	各自のテーマに沿った論文作成指導①	23	論文の完成に向けての個別指導⑦
9	各自のテーマに沿った論文作成指導②	24	論文の完成に向けての個別指導⑧
10	各自のテーマに沿った論文作成指導③	25	論文の完成に向けての個別指導⑨
11	各自のテーマに沿った論文作成指導④	26	論文の完成に向けての個別指導⑩
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤	27	論文の完成に向けての個別指導⑪
13	中間報告会に向けての指導①	28	研究発表会へ向けての指導①
14	中間報告会に向けての指導②	29	研究発表会へ向けての指導②
15	前期の研究指導の総括	30	研究指導Ⅱの総括
期末		期末	
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会での発表内容（30%）、論文執筆の遂行状況（30%）、研究発表会に向けての準備状況（40%）		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	V.A. ハワード 1982 “Artistry : The Work of Artists” Hackett Publishing Company G. ライル 1949 “The Concept of Mind” . Hutchinson その他、各自のテーマに沿った文献を適宜指示する		
参考文献	I. シェフラー 1979 “Conditions of Knowledge” . Chicago University Press. D. ショーン 2001 佐藤・秋田訳『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える』、ゆみる出版 生田久美子 2007 『「わざ」から知る』 東京大学出版会 その他、授業内または個別指導の中で、各自のテーマに沿った文献を適宜紹介する。		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導Ⅱ
担当者	生田 久美子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導Ⅱ」の授業を履修するために、各自の研究テーマに沿った文献を収集し、講読すること。
文献リスト	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を、「研究指導Ⅰ」の修了時、また授業及び個別指導の中で適宜指示する。
その他履修に必要な学習	現代社会における自分自身の研究テーマに関する新しい情報をニュース等のメディアを通して収集をするとともに、論文執筆に向けた構想を構築すること。

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	安村 清美		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>安村担当の研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえて修士論文の研究テーマ及び研究計画具体化のための指導を行う。前期は、表現体である人間としての「子ども」の表現特性に関する理解を基本におき、各自の研究内容に応じて論文執筆に必要な実践記録、文献や資料収集を進める。グループでの中間発表などの機会を設け指導を行う。後期は、修士論文完成に向けて個別指導を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの身体と行為に現れる表現に関して、人間文化としての舞踊という観点を通した子どもの身体へのまなざしの在り方や子どもに現れる身体行為をどう捉えるかなどを視点とし、修士論文の最終テーマに沿った実践の記録や文献・資料などの検索・収集を行う。</p> <p>2. 論文の内容および構成を整え中間発表をおこなう。</p> <p>3. 指導を受けながら執筆作業に集中し論文を完成させる。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて	16	イントロダクション—論文の完成に向けて
2	「子どもの身体」に関する論文の講読①	17	論文の完成に向けての個別指導①
3	「子どもの身体」に関する論文の講読②	18	論文の完成に向けての個別指導②
4	「子どもの身体」に関する論文の講読③	19	論文の完成に向けての個別指導③
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①	20	論文の完成に向けての個別指導④
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②	21	論文の完成に向けての個別指導⑤
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③	22	論文の完成に向けての個別指導⑥
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④	23	論文の完成に向けての個別指導⑦
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤	24	論文の完成に向けての個別指導⑧
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥	25	論文の完成に向けての個別指導⑨
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦	26	論文の完成に向けての個別指導⑩
12	中間報告会に向けての指導①	27	論文の完成に向けての個別指導⑪
13	中間報告会に向けての指導②	28	研究発表会へ向けての指導①
14	中間報告会に向けての指導③	29	研究発表会へ向けての指導②
15	前期の研究指導の総括	30	研究指導Ⅱの総括
期末		期末	
授業に関する連絡	授業時間は、受講者と教員が相談した上で決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会での発表内容（30%）、論文執筆の遂行状況（30%）、研究発表会に向けての準備状況（40%）		
事前・事後学習の内容	事前、事後学習ともに、各自の研究テーマと計画に沿って各回具体化した課題の集積をしていく。		
履修上の注意	子ども・保育における表現の実践を研究の手掛かりにして研究・論文作成を進めることを前提としている。		
テキスト	各自の研究テーマに即して設定する。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導Ⅱ
担当者	安村 清美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導Ⅱ」の授業を履修するために、各自の研究テーマに沿った文献を収集し精読すること。また、保育現場における子どもの表現活動の実践記録をとるなど資料収集に努めること。
文献リスト	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献・資料・先行研究を、授業及び個別指導の中で適宜指示する。
その他履修に必要な学習	自分自身の研究テーマに関する新しい情報を様々なメディアを用いて収集をするとともに、論文執筆に向けた構想を構築すること。

科目名	研究指導Ⅱ		副題	
担当者	佐伯 胖			
開講期	通年	単位数	4単位	配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>佐伯担当の研究指導Ⅱでは、「子ども人間学」分野の幼児教育研究への理解を深め、修士論文執筆の指導をしていく。前期は、Reddy, V. How infants know minds. Harvard University Press, 2008をもとに、発達心理学における乳幼児研究について、従来研究が陥っていたさまざまな落とし穴について、特に、「心の理論」研究、「共同注意」研究に焦点を当てて理論的に究明し、乳幼児の「心」にしっかり寄り添うことの理論的基盤を学ぶ。後期には、指導生の修士論文テーマに即して、個別的に論文執筆の指導に当たるが、指導生が共通に関心を持つべき論文や著書を適宜用いて、個別指導のほかにグループ指導も行う。</p>			
授業のねらい・到達目標	<p>前期は研究の「メタ理論」（理論の背後にある発達観、学習観）を鍛える。</p> <p>後期は論文執筆の作法、倫理、文献検索、などを中心に学び、理解する。</p>			
授業の方法・授業計画				
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて	16	イントロダクションー論文の完成に向けて	
2	"How infants know minds"を読む①	17	論文の完成に向けての個別指導①	
3	"How infants know minds"を読む②	18	論文の完成に向けての個別指導②	
4	"How infants know minds"を読む③	19	論文の完成に向けての個別指導③	
5	『共感一育ち合う保育のなかでー』を読む①	20	論文の完成に向けての個別指導④	
6	『共感一育ち合う保育のなかでー』を読む②	21	論文の完成に向けての個別指導⑤	
7	『共感一育ち合う保育のなかでー』を読む③	22	論文の完成に向けての個別指導⑥	
8	『共感一育ち合う保育のなかでー』を読む④	23	論文の完成に向けての個別指導⑦	
9	各自の論文執筆計画を立てる①	24	論文の完成に向けての個別指導⑧	
10	各自の論文執筆計画を立てる②	25	論文の完成に向けての個別指導⑨	
11	各自の論文執筆計画を立てる③	26	論文の完成に向けての個別指導⑩	
12	中間報告会に向けての指導①	27	論文の完成に向けての個別指導⑪	
13	中間報告会に向けての指導②	28	研究発表会へ向けての指導①	
14	中間報告会に向けての指導③	29	研究発表会へ向けての指導②	
15	前期の研究指導の総括	30	研究指導Ⅱの総括	
期末		期末		
授業に関する連絡	授業時間は、受講者と教員が相談した上で決める。			
評価方法及び評価基準	修士論文の審査			
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。			
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。			
テキスト	Reddy, V. How infants know minds. Harvard University Press, 2008 佐伯 胖編『共感一育ち合う保育のなかでー』ミネルヴァ書房、2007年			
参考文献	アメリカ心理学会編 江藤裕之・前田樹海・田中建彦訳 『APA論文作成マニュアル』医学書院、2004年			

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導Ⅱ
担当者	佐伯 胖
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導Ⅱ」の授業を履修するために、各自の研究テーマに沿った文献を収集し、講読すること。
文献リスト	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を、「研究指導Ⅰ」の修了時、また授業及び個別指導の中で適宜指示する。
その他履修に必要な学習	学会誌『保育学研究』、『発達心理学研究』、『質的心理学研究』などから、興味深い論文を選び、精読する習慣を身につけること。

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	石橋 哲成		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次
			2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、ゼミ生の各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>前期は、ゼミ生の修士論文における基本文献と一緒に読んでいき、論文の書き方等も含めて指導を行う。後期は、受講生が書いてきた論文の下書きを添削・指導をしていきながら、そこで見られる問題について、検討していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>前期は、基本文献をきちんと読んでいく力を養うとともに、その内容をきちんと理解し、修士論文としてまとめていく技術を会得する。</p> <p>後期は、教員の指導を受けながら、執筆作業に集中し、論文の完成に向かう。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて	16	イントロダクションー論文の完成に向けて
2	ゼミ生の修士論文における基本文献の購読①	17	論文の完成に向けての個別指導①
3	ゼミ生の修士論文における基本文献の購読②	18	論文の完成に向けての個別指導②
4	ゼミ生の修士論文における基本文献の購読③	19	論文の完成に向けての個別指導③
5	ゼミ生の修士論文における基本文献の購読④	20	論文の完成に向けての個別指導④
6	ゼミ生の修士論文における基本文献の購読⑤	21	論文の完成に向けての個別指導⑤
7	ゼミ生の修士論文における基本文献の購読⑥	22	論文の完成に向けての個別指導⑥
8	各自のテーマに沿った論文作成指導①	23	論文の完成に向けての個別指導⑦
9	各自のテーマに沿った論文作成指導②	24	論文の完成に向けての個別指導⑧
10	各自のテーマに沿った論文作成指導③	25	論文の完成に向けての個別指導⑨
11	各自のテーマに沿った論文作成指導④	26	論文の完成に向けての個別指導⑩
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤	27	論文の完成に向けての個別指導⑪
13	ゼミ内における研究中間報告①	28	論文の完成に向けての個別指導⑫
14	ゼミ内における研究中間報告②	29	論文の完成に向けての個別指導⑬
15	前期の研究指導の総括	30	研究指導Ⅱの総括
期末		期末	
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談の上授業時間を決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会での発表内容（30%）、論文執筆の遂行状況（30%）、研究発表会に向けての準備状況（40%）		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	各自がテーマ形成に向けて積極的に参加すること。		
テキスト	ゼミ生（受講生）と相談の上で決定する。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導Ⅱ
担当者	石橋 哲成
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導Ⅱ」の授業を履修するために、各自の研究テーマに沿った文献を収集し、講読すること。
文献リスト	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を、「研究指導Ⅰ」の終了時、また授業及び個別指導の中で適宜指示する。
その他履修に必要な学習	「実践なき理論」では確かに「空虚」であるが、「理論なき実践」では、何を目的に保育を行おうとしているのか分からなくなり、「盲目」になってしまう。自分は保育実践を通してどのような理論（思想）に問題意識を持っているのかを明確にしするとともに、論文執筆に向けた構想を構築すること。

科目名	研究指導II	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	通年	単位数	4単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導IIでは、研究指導Iでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当てて、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>犬塚担当の研究指導IIでは、「食育」という概念を教育学の視点から捉えて文献を読み進めながら、各自の論文の最終テーマに沿って指導を行う。受講者は教員の指導を受けながら執筆作業を始める。集中的に論文作成の指導及び論文審査会での発表に向けて指導を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文作成に必要な研究計画の立案，研究データ・資料の収集・分析・考察を行う。</p> <p>2. 文献レビューから方法論の探求を行い，方法論を決め，それに沿った研究方法にて研究を進め，修士論文作成・完成をめざす。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて	16	イントロダクション—論文の完成に向けて
2	『食育白書』を読む①	17	論文の完成に向けての個別指導①
3	『食育白書』を読む②	18	論文の完成に向けての個別指導②
4	『食育白書』を読む③	19	論文の完成に向けての個別指導③
5	『食育白書』を読む④	20	論文の完成に向けての個別指導④
6	『食育白書』を読む⑤	21	論文の完成に向けての個別指導⑤
7	『食育白書』を読む⑥	22	論文の完成に向けての個別指導⑥
8	各自のテーマに沿った論文作成指導①	23	論文の完成に向けての個別指導⑦
9	各自のテーマに沿った論文作成指導②	24	論文の完成に向けての個別指導⑧
10	各自のテーマに沿った論文作成指導③	25	論文の完成に向けての個別指導⑨
11	各自のテーマに沿った論文作成指導④	26	論文の完成に向けての個別指導⑩
12	中間報告会に向けての指導①	27	論文の完成に向けての個別指導⑪
13	中間報告会に向けての指導②	28	研究発表会へ向けての指導①
14	中間報告会に向けての指導③	29	研究発表会へ向けての指導②
15	前期の研究指導の総括	30	研究指導IIの総括
期末		期末	
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談の上授業時間を決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会での発表内容（30%），論文執筆の遂行状況（30%），研究発表会に向けての準備状況（40%）		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索やデータ収集・整理を行い，授業後には教員や他の学生から得たフィードバックを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず，教員との個別指導を通して，計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	『食育白書』（平成29年版）農林水産省。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導Ⅱ
担当者	犬塚 典子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導Ⅱ」の授業を履修するために、「子ども人間学」と関連して生涯学習支援、ならびに、各自の研究テーマに沿った文献を収集し、講読すること。
文献リスト	<p>①日本教育学会編『教育学研究』各号。</p> <p>②日本保育学会編『保育学研究』各号。</p> <p>③田園調布学園大学『田園調布学園大学紀要』各号。</p> <p>④お茶の水女子大学『子ども学研究紀要』各号。</p> <p>⑤広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設『幼年教育研究年報』各号。</p> <p>⑥National Association for the Education of Young Children (NAEYC), <i>Early Childhood Research Quarterly</i>, 各号。</p> <p>⑦European Early Childhood Education Research Association (EECERA), <i>European Early Childhood Education Research Journal</i>, 各号。</p> <p>⑧Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA), <i>Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education</i>, 各号。</p>
その他履修に必要な学習	自分自身の研究テーマに関する新しい情報をニュース等のメディアを通して収集するとともに、論文執筆に向けた構想を構築すること。

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	内藤 知美		
開講期	通年	単位数	4単位
			配当年次
			2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>内藤担当の研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえ、各受講者の修士論文のテーマに即し、論文作成のための指導を中心に進めていく。前期は、各自の研究内容に応じて必要な文献やデータの収集を進め、その検討を通して、各自の研究テーマおよび研究計画具体化のための指導を行う。後期は、修士論文完成に向けての個別的な指導が中心となるが、受講者が共通に関心を持つべき論文や著書を用いて、適宜グループ指導も行っていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>前期は、修士論文のテーマ決定とそのテーマに沿った文献やデータの収集・検討を進める。</p> <p>後期は、教員の指導を受けながら、修士論文を完成させる。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の執筆に当たってー	16	イントロダクションー論文の完成に向けてー
2	『子どもの主体的な学びと保育カリキュラム』に関する論文を読む①	17	論文の完成に向けての個別指導①
3	『子どもの主体的な学びと保育カリキュラム』に関する論文を読む②	18	論文の完成に向けての個別指導②
4	『子どもの主体的な学びと保育カリキュラム』に関する論文を読む③	19	論文の完成に向けての個別指導③
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①	20	論文の完成に向けての個別指導④
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②	21	論文の完成に向けての個別指導⑤
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③	22	論文の完成に向けての個別指導⑥
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④	23	論文の完成に向けての個別指導⑦
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤	24	論文の完成に向けての個別指導⑧
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥	25	論文の完成に向けての個別指導⑨
11	中間報告会に向けての準備①	26	論文の完成に向けての個別指導⑩
12	中間報告会に向けての準備②	27	論文の完成に向けての個別指導⑪
13	中間報告会に向けての準備③	28	研究発表会へ向けての指導①
14	中間報告会に向けての準備④	29	研究発表会へ向けての指導②
15	前期の研究指導の総括	30	研究指導Ⅱの総括
期末		期末	
授業に関する連絡	授業時間は受講者と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会での発表内容（30%）、論文執筆の遂行状況（30%）、研究発表会に向けての準備状況（40%）		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索やデータ収集・整理を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーションー新しい学びの創造に向けて』, 東京大学出版会, 2015年		
参考文献	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を授業及び個別指導時に適宜指示する。		

【予備学習ガイド】

科目名	研究指導Ⅱ
担当者	内藤 知美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「研究指導Ⅱ」の授業を履修するために、各自の研究テーマに沿った文献を収集し、講読すること。
文献リスト	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を、「研究指導Ⅰ」の修了時、また授業及び個別指導時に適宜指示する。
その他履修に必要な学習	現代社会における自分自身の研究テーマに関する新しい情報を収集するとともに、論文執筆に向けての構想を構築すること。